vZ¢ =RÐ*C {H

vZ¢ =RÐ*C {yHøù÷B

SS ‡j iM M dV

øÐ÷

GÊH ¨{

{¨ HÊG

vZúfè¢¢b¤»à£T‹ÄÀtPO’ =RC÷Ð*C {

Ë“°ã

VZ¢-•q

v Z ¢ - - • » q

宮崎市文化財調査報告書　第120集

大町第２遺跡

おおまちだいにせき

宮崎駅東通線（西中工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

宮崎市教育委員会

序

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内では様々な開発事業が行われていますが、地中には遺跡（埋蔵文化財）と呼ばれる、われわれの先祖が生活を行った痕跡が埋まった場所があります。工事により消失を余儀なくされた埋蔵文化財に対して、教育委員会は発掘調査を実施し、過去の人々の生活の様子を記録し、後世へと伝えています。

今回発掘調査を行った大町第２遺跡は、吉村町大町にあります。宮崎駅東側に当たるこの地域は、近年再開発が進んでおり、道路建設に当たって、千年以上前に立てられた５軒の竪穴住居が確認されました。調査で出土した多くの遺物は、当時の素朴な生活を窺わせます。現代に生きる私たちは、調査成果を未来へと残してゆかねばなりません。

大町第２遺跡の発掘調査は夏に実施されました。工事と併行した調査期間中は、猛暑も台風も訪れましたが、調査を終え、こうして報告書の刊行に至ることができたのも、発掘作業に携わった作業員の方々や、調査にご理解いただいた地権者をはじめ周辺住民の方々のご協力によるものです。末尾ではございますが、この場を借りまして、心よりお礼申し上げます。

平成30年３月

宮崎市教育委員会

教育長　二　見　俊　一

例　　言

1．本書は、宮崎駅東通線（西中工区）整備事業工事に伴う、宮崎県宮崎市吉村町大町に所在する大町第２遺跡の発掘調査報告書である。

2．本業務は、宮崎市都市整備部市街地整備課より依頼を受けて平成27年度から実施している。発掘調査は平成27年度に終了し、平成28年度に整理作業、平成29年度に報告書作成作業を実施した。

3．発掘調査、整理作業は以下の手続きを経て実施した。

（平成27年度）

工事通知　平成27年７月７日（宮市街第71号）
進達文書　平成27年７月15日（宮教文第407号１）
伝達文書　平成27年７月21日（0850－７－73）
発掘調査　平成27年８月18日～平成27年10月8日
着手報告　平成27年８月26日（宮教文第454号４）
発見通知　平成27年10月13日（宮教文第454号６）
完了報告　平成27年10月16日（宮教文第454号８）
保 管 証　平成27年10月23日（宮教文第454号９）

（平成28年度）

整理作業　平成28年５月18日～平成29年２月28日

（平成29年度）

整理作業　平成29年５月１日～平成29年３月31日

4．調査組織は以下のとおりである。

調査主体　宮崎市教育委員会　文化財課

（平成27年度）

発掘調査

文化財課	課長	日高　貞幸
調査総括	埋蔵文化財係長	井田　篤
調整担当	主任技師	河野　裕次
調査・整理担当	主査	金丸　武司
	嘱託員	大嶋　昭海
	※調査事務	市街地整備課

（平成28年度）

整理作業

文化財課	課長	日高　貞幸
整理総括	埋蔵文化財係長	井田　篤
調整担当	主任技師	河野　裕次
整理担当	主査	金丸　武司
	嘱託員	小野　貞子
	※調査事務	市街地整備課

（平成29年度）
報告書作成

文化財課	課長	羽木本光男
整理総括	副主幹兼埋蔵文化財係長	井田　篤
調整担当	主任技師	河野　裕次
整理担当	主査	金丸　武司
	嘱託員	小野　貞子
	※調査事務	市街地整備課

5．現地における測量は、金丸と大嶋が行った。

6．遺物の実測・トレースは、金丸と小野、及び室内整理作業員が行った。

7．遺構の写真撮影は金丸と大嶋が行った。また、空中写真撮影は、(有)スカイサーベイ九州に業務委託した。なお、出土遺物の写真撮影は金丸が行った。

8．本書で使用する北は真北である。

9．本書で使用する土色の表記は『新版　標準土色帳』に依拠した。

10. 出土遺物及び掲載図面及び写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

11. 本書の執筆や編集は金丸が行った。

目　　次

本文目次

第Ⅰ章　はじめに ･････････････････ 1
　第１節　遺跡の立地･････････････････ 1
　第２節　遺跡の歴史的環境･････････････ 1
　第３節　調査に至る経緯･･････････････ 4
第Ⅱ章　調査の成果 ･････････････････ 5
　第１節　調査の概要･････････････････ 5
　第２節　層　序･････････････････････ 5
　第３節　古墳時代から古代の調査成果･ 5
　第４節　表土中の出土遺物･････････････ 26
第Ⅲ章　総　括･･････････････････････ 27

挿図目次

第１図　大町第２遺跡位置図･････････････ 2
第２図　大町第２遺跡周辺地形図･･････････ 2
第３図　宮崎平野治水地形分類図更新版･ 3
第４図　大町第２遺跡遺構分布図･･････････ 5
第５図　竪穴建物１実測図･･････････････ 6
第６図　竪穴建物１内土器埋設炉と
　　出土土器･･････････････････ 7
第７図　竪穴建物１内土坑と出土土器･･･ 7
第８図　竪穴建物１内出土遺物実測図(1) 8
第９図　竪穴建物１内出土遺物実測図(2) 9
第10図　竪穴建物１内出土遺物実測図(3) 10
第11図　竪穴建物１内出土遺物実測図(4) 11
第12図　竪穴建物１内出土遺物実測図(5) 12
第13図　竪穴建物１遺物
　　出土状況実測図･････ 13・14
第14図　竪穴建物２実測図･･････････････ 15
第15図　竪穴建物２内土器埋設炉と
　　出土土器･･････････････････ 16
第16図　竪穴建物２内遺物出土状況と
　　出土土器･･････････････････ 16
第17図　竪穴建物２内出土遺物実測図･･･ 17
第18図　竪穴建物３実測図･･････････････ 18
第19図　竪穴建物３内土坑実測図･･････････ 18
第20図　竪穴建物３内出土遺物実測図･･･ 19
第21図　竪穴建物４実測図･･････････････ 20
第22図　竪穴建物４内出土遺物実測図･･･ 20
第23図　土坑１実測図･･････････････････ 21
第24図　構状遺構１，２実測図･････････････ 21
第25図　表土出土遺物実測図･･････････････ 22

表図版

第１表　出土土器観察表（１）･････････ 24
第２表　出土土器観察表（２）･･･････････ 25

写真図版

図版１　遺構分布、竪穴建物１･････････ 29
図版２　竪穴建物１・２･･････････････ 30
図版３　竪穴建物２・３・４ ･･････････ 31
図版４　その他の遺構･････････････････ 32
図版５　遺物写真（１）･･････････････ 33
図版６　遺物写真（２）･･････････････ 34
図版７　遺物写真（３）･･････････････ 35
図版８　遺物写真（４）･･････････････ 36

第Ⅰ章　はじめに

第１節　遺跡の立地

宮崎平野の中心を流れる大淀川は、熊本、鹿児島県を含む九州山地を水源とし、上流で侵食された土砂は河川に乗って下流へと運搬され、河口付近では運んだ土砂が堆積し、宮崎平野と呼ばれる沖積平野を形成した。大淀川は、宮崎平野内で何度も流路を変えており、その形跡は浅い谷状の地形として、現在まで残されている。

一方東側では、砂丘（浜堤）が形成される。日向灘に沿って南北に伸びる砂丘は、大淀川より北側においてより明瞭に認められる。砂丘間は低地となり、砂丘が形成された弥生時代以降の遺跡形成に大きな影響を与える。大淀川下流域である宮崎平野東側は、段丘面、砂丘、旧河川が混在した、複雑な地形を呈する。

（第３図）は、宮崎平野の治水地形分類図である。宮崎平野の西側に広がる段丘面は、上流から運ばれた堆積物により形成されるが、宮崎駅の東側は旧河川の流路や浅い谷によって島状に分断される。更に東側は、段丘面の代わりに砂丘が点在する。

今回発掘調査を実施した大町第２遺跡は、宮崎駅の東口から大町団地に至るまで筋状に伸びる段丘面の北端部に立地する。遺跡周辺では段丘面が比較的広がっており、この広がりの中に大町遺跡も立地する。

第２節　遺跡の歴史的環境

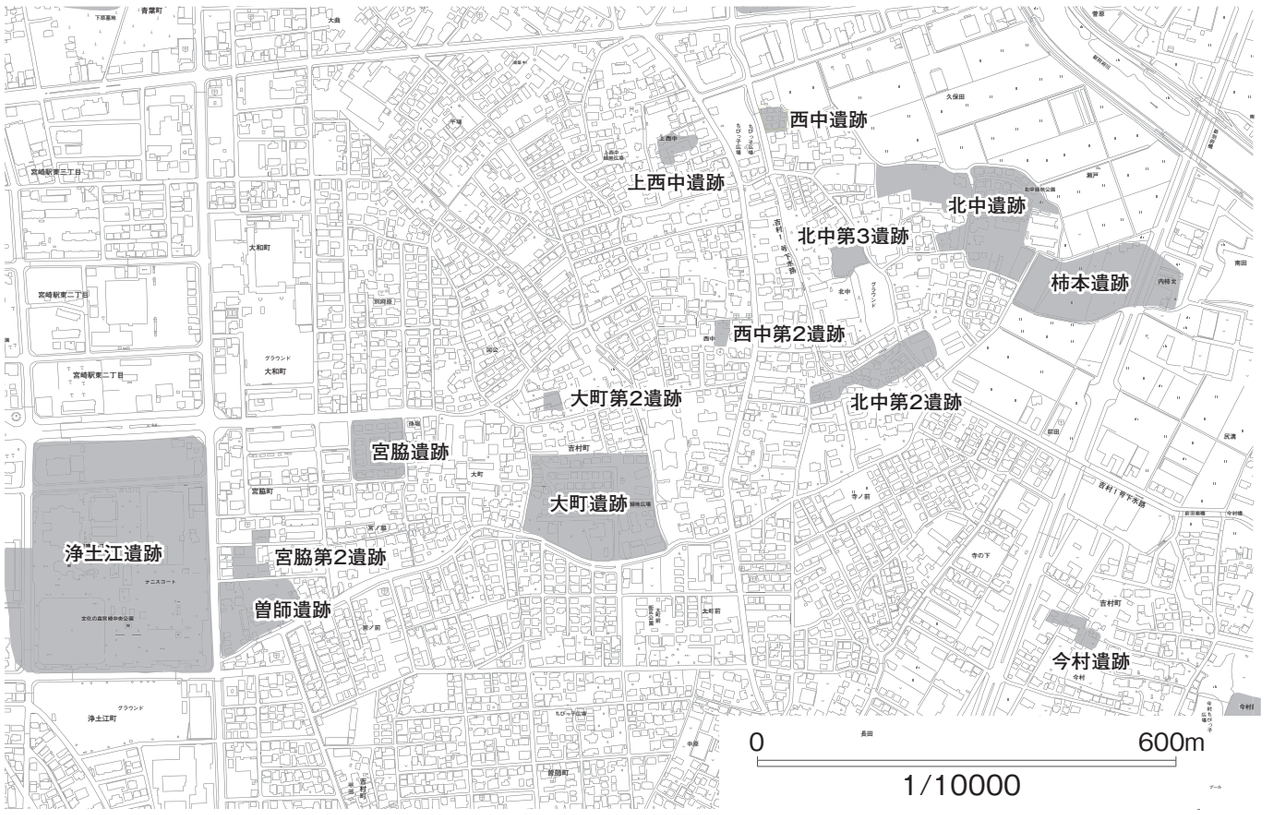
大町第２遺跡周辺は、多くの遺跡が分布する。周辺遺跡の分布は（第２図）に示したとおりである。

大町第２遺跡の南側に近接する大町遺跡は、平成８年に宅地造成に伴い発掘調査が実施され、弥生時代の竪穴建物２軒、掘立柱建物３棟、周溝状遺構３基、古墳時代後期（6c後半～7c前半）の竪穴建物61軒、竪穴建物の壁面を利用した地下式横穴墓３基、竪穴状遺構６基が検出された。特に古墳時代の竪穴建物は非常に密集しており、集落域は調査区外にも広がっていたと考えられる。竪穴建物の軒数ばかりでなく、出土した遺物の量からも、大淀川河口周辺の古墳時代を代表する集落遺跡である。

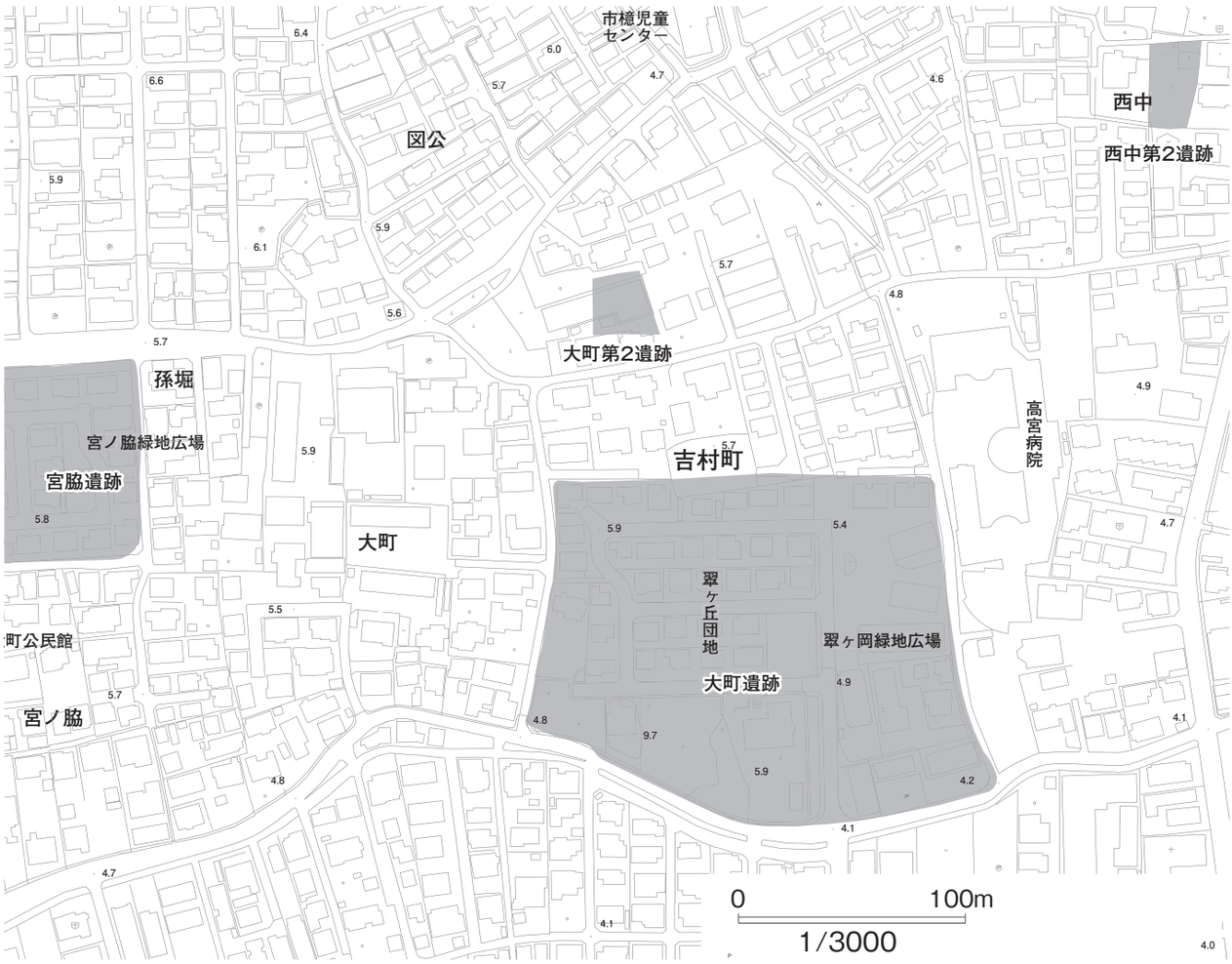
大町第２遺跡の南西、細長く延びる段丘面には宮脇第２遺跡が立地する。平成14年、施設改築に伴い発掘調査が実施され、古墳後期（6c後半）の竪穴建物が11軒確認された。竪穴建物からはカマドで祭祀を行った痕跡が検出されたほか、「大」の字が刻まれた刻書土器（8c末～9c初）が出土した。

宮崎駅の東方に細長く延びる段丘面の西端部、旧宮崎刑務所の跡地があった地点には、浄土江遺跡が立地する。再開発に伴い、昭和52年、53年、54年、平成３年と４次にわたり発掘調査を実施した結果、古墳時代中期（5c代）～奈良時代の竪穴住居33軒ほか、溝状遺構が多数検出された。集落の中心は古墳時代後期（6c代）～奈良時代（8c代）であり、集落域を想定すると、近接する宮脇第2遺跡もこの集落の一部と考えられる。

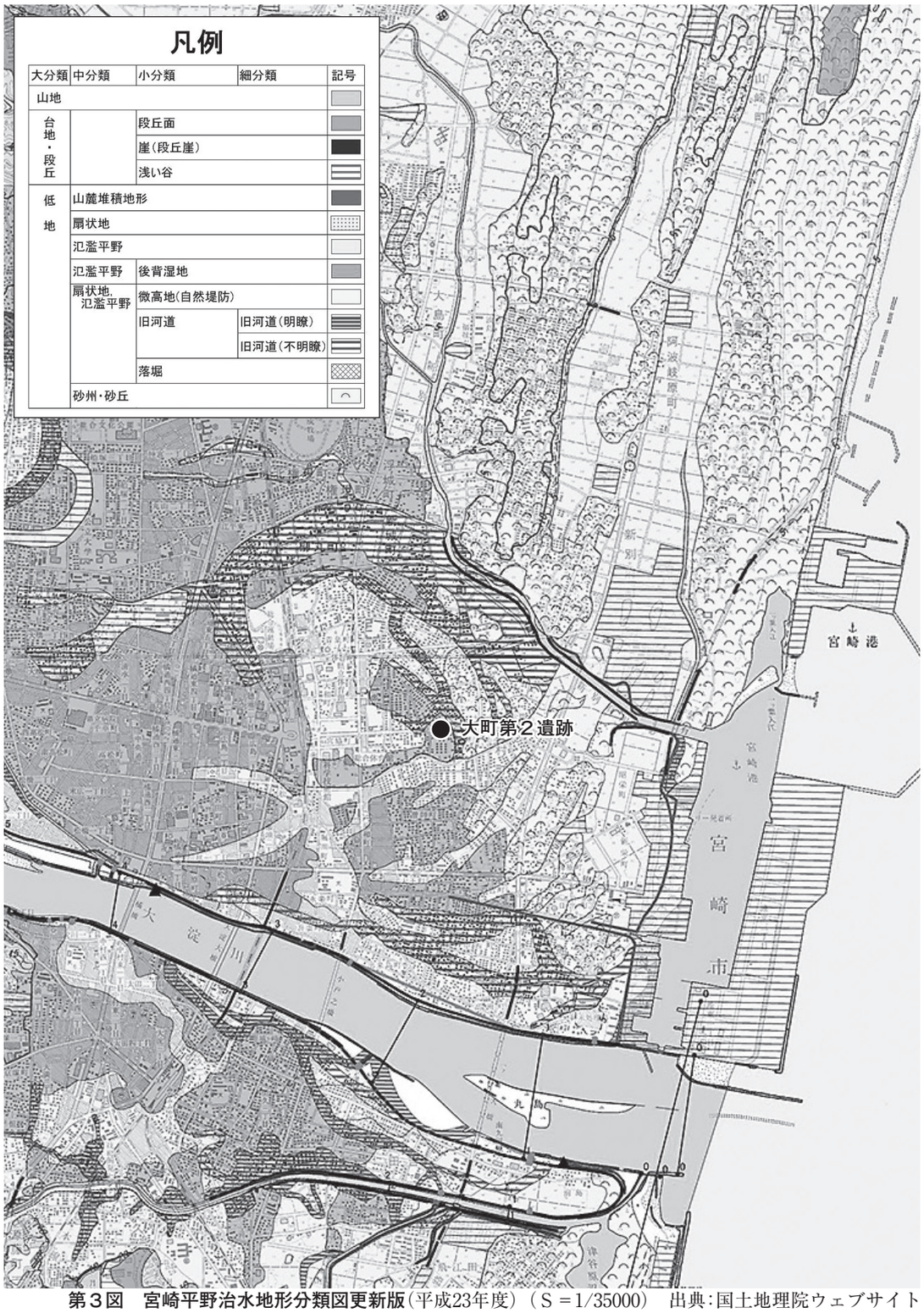
大町第２遺跡の立地する段丘面の、旧河道を挟んだ東側は、旧河道により分断されながら砂



第１図　大町第２遺跡位置図（Ｓ＝1/10000）



第２図　大町第２遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/3000）



第３図　宮崎平野治水地形分類図更新版（平成23年度）（Ｓ＝1/35000）　出典：国土地理院ウェブサイト

丘が広がるが、この砂丘上には北中遺跡が立地する。平成９年、13年、14年、26年（２回）の５次にわたり発掘調査が実施され、古墳時代に当たる竪穴建物（26＋α）、掘立柱建物（α）、地下式横穴墓（10基）が検出されたことから、古墳時代中期後半（5c後半）～後期（6c代）、大町遺跡とほぼ同時期の集落が存在したと考えられる。出土遺物は、薩摩・大隅系の成川式土器（6c代）の出土が特筆されるほか、鉄器生産に関わる遺物も確認されている。北中遺跡は近年も発掘調査が行われ、新たな知見が得られている。

このように、大町第２遺跡の周辺は、特に古墳時代から古代にかけての遺跡が卓越する地域である。

第３節　調査に至る経緯

平成26年12月25日付け、市街地整備課より宮崎駅東通線（西中工区）について、埋蔵文化財の照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「大町遺跡」の近接地にあたることから、平成27年６月15日～17日にかけて試掘調査を実施した。その結果、事業予定地の西側において、古墳時代の竪穴建物を検出した。県文化財課は、この試掘調査結果を受け、平成27年７月６日、新発見の埋蔵文化財包蔵地「大町第２遺跡」とした。

市文化財課は平成27年６月25日に市街地整備課と協議し、開発内容が道路建設であることから、工事にあたっては発掘調査が不可避と判断し、平成27年８月18日～平成27年10月８日にかけて発掘調査を実施した。

また、道路脇に設けられる側溝部分は、規模が狭小であることから、掘削時に文化財課職員による工事立会を実施した。工事立会は、平成27年８月19日、同年８月28日、９月８日の三度にわたった。

（参考文献）

宮崎市教育委員会編　1981『浄土江遺跡』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第６集
宮崎市教育委員会編　1993『浄土江遺跡Ⅱ』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第25集
宮崎市教育委員会編　1998『大町遺跡』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第33集
宮崎市教育委員会編　1999『北中遺跡』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第38集
宮崎市教育委員会編　2002『北中遺跡Ⅱ』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第51集
宮崎市教育委員会編　2003『宮脇第２遺跡』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第55集
宮崎市教育委員会編　2003『北中遺跡Ⅲ』　宮崎市文化財調査報告書　宮崎市教育委員会　第56集

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　調査の概要

調査は、バックホウにて表土を剥いだ後、人力にて遺構検出を行った。調査前は宅地であったため、戦後のゴミ穴などの撹乱が激しかったが、その中で暗褐色土のプランを確認、竪穴建物と判断し、土層を確認しながら掘削を行った。

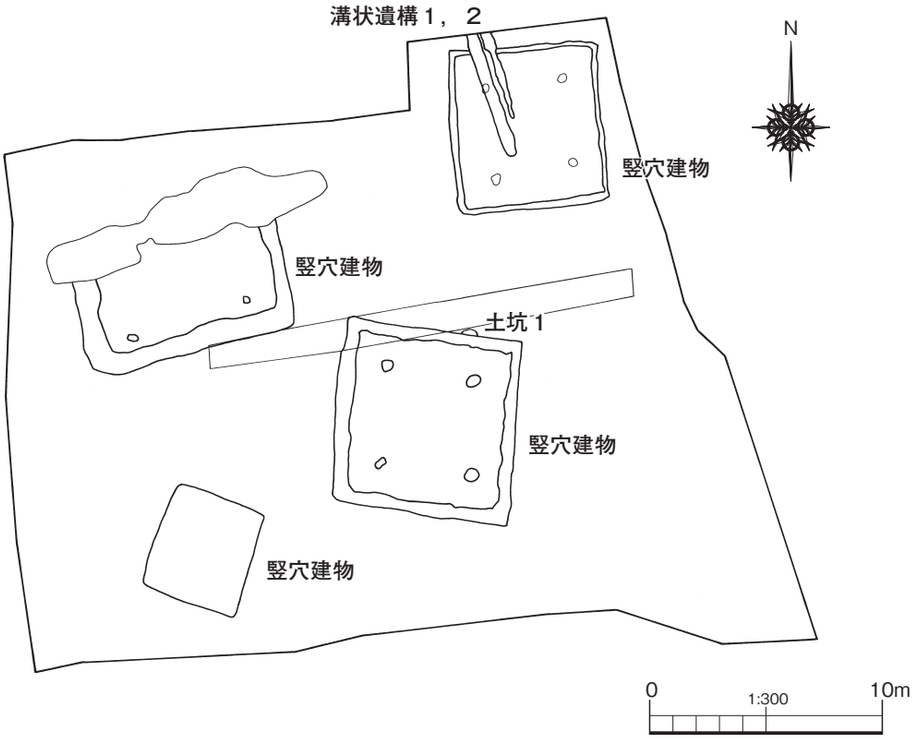
遺構は、竪穴建物を５基、溝を２条、土坑を１基確認した。調査で確認された竪穴建物（SA１）と２条の溝は、調査区域外まで伸びていたため、市街地整備と協議のうえSA１の全てが確認される範囲まで拡張した。なお、竪穴建物（SA５）は、工事立会いの際に掘削断面にて確認した。

第２節　層序

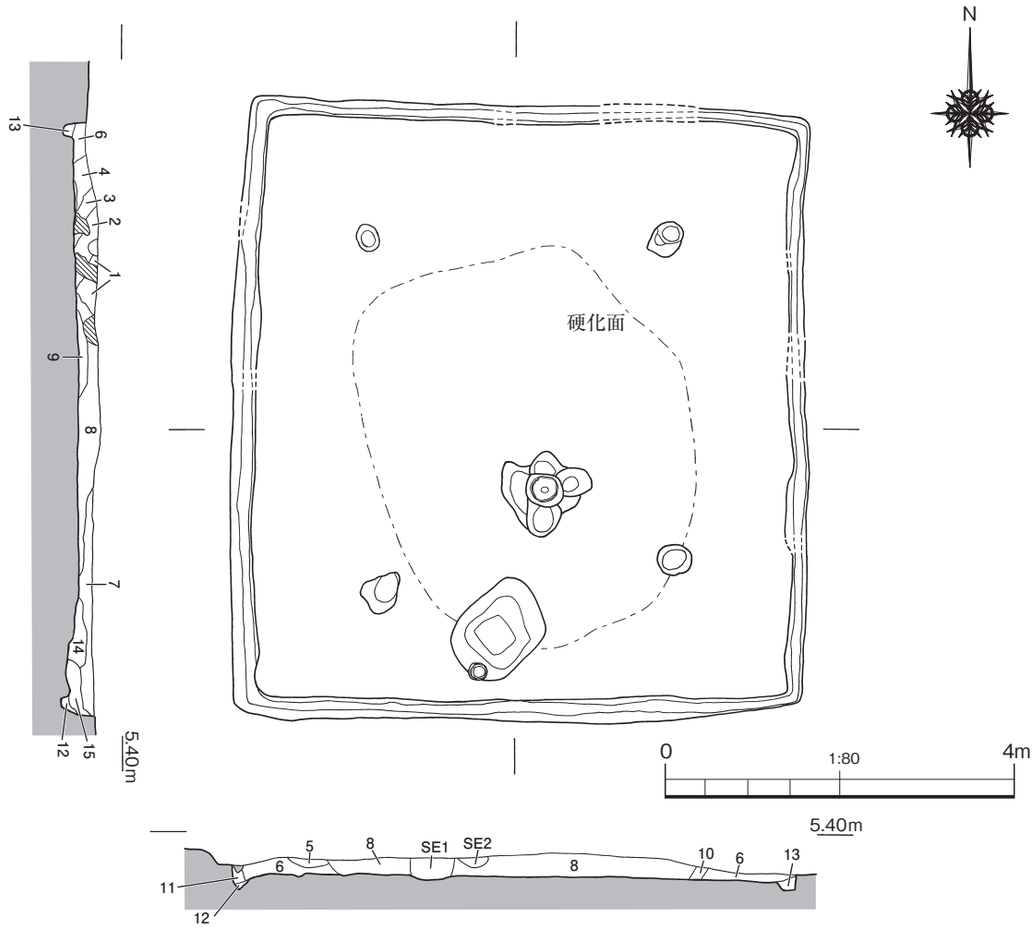
調査区内の土層堆積は、Ⅰ層：表土（砂質土＋粘質土）、Ⅱ層：黄褐色シルト質土、Ⅲ層：灰褐色砂質土層である。Ⅰ層の深さは40㎝前後であり、Ⅱ層は約50㎝である。Ⅱ層は遺構検出面であり、遺物包含層は確認されなかった。これは、微高地上に宅地が形成された際、上層を削平した結果と考えられる。調査区内も、東から西に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しているが、これも後世の削平の結果と考えられる。

第３節　古墳時代から古代の調査成果

調査で検出した遺構は竪穴建物、溝、土坑である。検出面は全てⅡ層上面である。出土遺物から、遺構は古墳時代もしくは古代のものと考えられる。

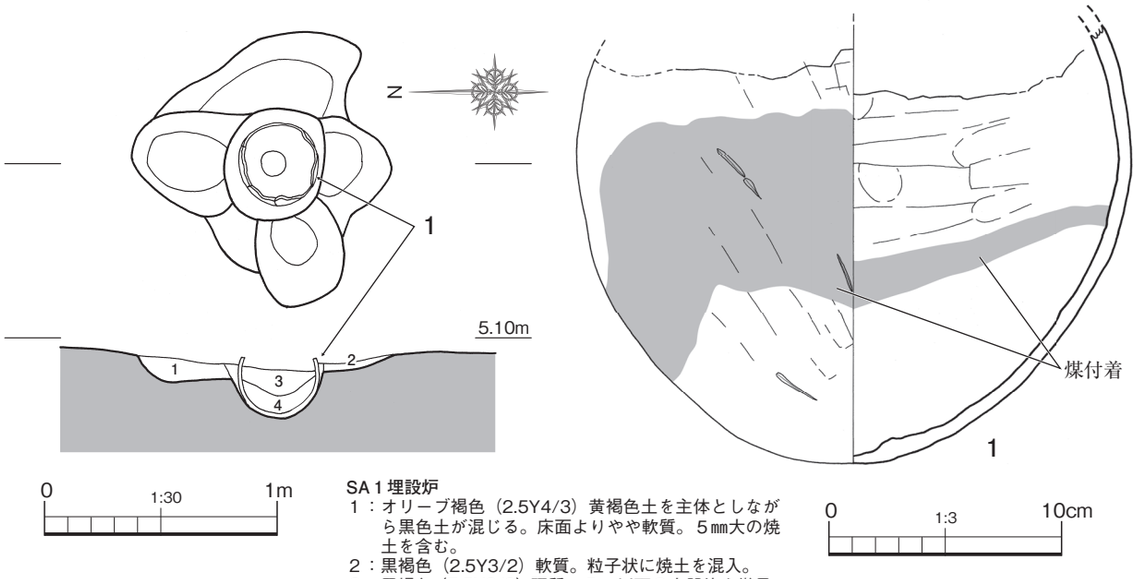


第４図　大町第２遺跡遺構分布図（Ｓ＝1/300）



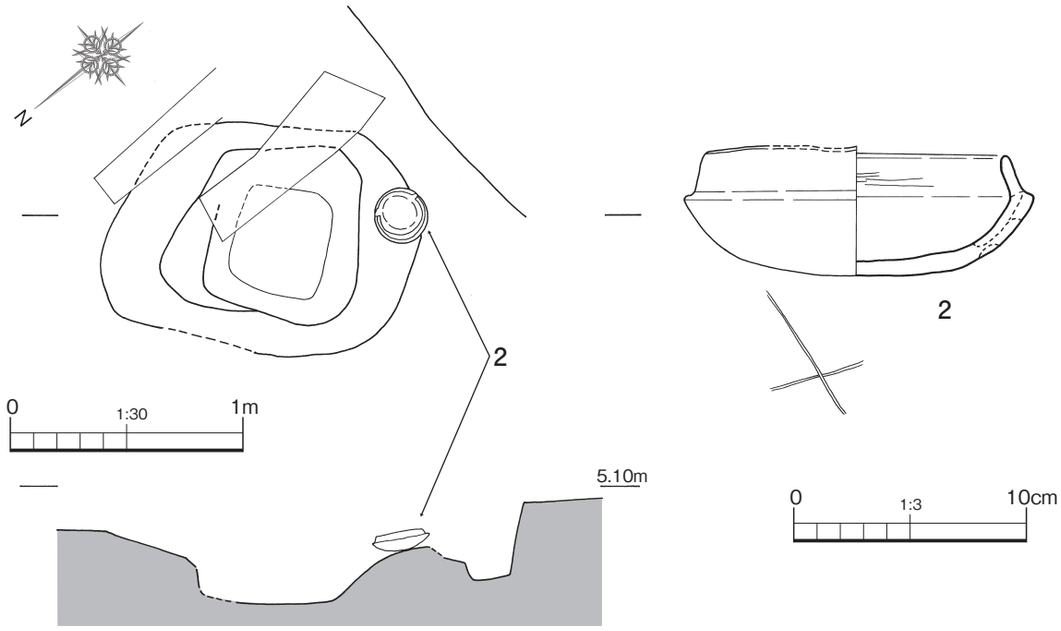
第５図　竪穴建物１実測図（Ｓ=1/80）

SA１
１：暗褐色(10YR3/3)粘性あり、締まっている。黒褐色土と黄褐色土(地山)の混合層。炭化物あり。
２：暗褐色(10YR3/3)粘性あり、締まり弱い。黒褐色土と黄褐色土(地山)の混合層。１より黄褐色土の混入が少ない。
３：暗褐色(10YR3/4)粘性あり、締まっている。地山に混入する軽石を僅かに含む。炭化物部料含む。
４：暗褐色(10YR3/3)粘性あり、締まっている。黒褐色、黄褐色による斑紋を形成する。
５：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性弱い、締まり弱い。６層よりやや明るい色調。
６：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性あり、締まりあり。黒褐色土に黄褐色土を僅かに含む。
７：黒褐色(10YR2/3)粘性あり、締まりあり。炭化物を含む。８層よりやや明るい色調。
８：黒褐色(10YR3/2)粘性弱く、締まりあり。炭化物含む。９層よりやや暗い色調。
９：黒褐色(10YR3/2)粘性弱く、締まりあり。僅かに地山の黄褐色土を混入。炭化物混入。
10：暗褐色(10YR3/3)粘性弱く、締まり弱い。８層より地山の黄褐色土を多く含む。
11：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性弱い、締まり弱い。
12：褐色土(10YR4/9)粘性弱い、締まり弱い。床面に似るが、黒褐色土が疎らに混じる。
13：黄褐色(10YR5/6)粘性なく、締まり弱い。炭化物混じる。
14：暗褐色(10YR3/4)粘性あり、締まりあり、黄褐色土を多く含む。５㎜大の炭化物を多く含む。
15：暗褐色(10YR3/4)粘性あり、締まりあり、14層と基本的に同一だが、やや黄褐色土を多く含む。
SE１：黒褐色(10YR3/2)粘性あり、締まり強い。黄褐色土、炭化物を疎らに含む。
SE２：暗褐色(10YR3/３)粘性、締まりあり。１㎝大の黄褐色ブロックを含む。



SA１埋設炉
１：オリーブ褐色（2.5Y4/3）黄褐色土を主体としながら黒色土が混じる。床面よりやや軟質。５㎜大の焼土を含む。
２：黒褐色（2.5Y3/2）軟質。粒子状に焼土を混入。
３：黒褐色（7.5Y2/2）硬質。５㎜以下の土器片を微量、焼土粒子を少量含む。
４：黒褐色（7.5Y2/2）軟質。５㎜以下の土器片を多く、焼土粒子を少量、灰のブロックを多く含む。

第６図　竪穴建物１内土器埋設炉と出土土器



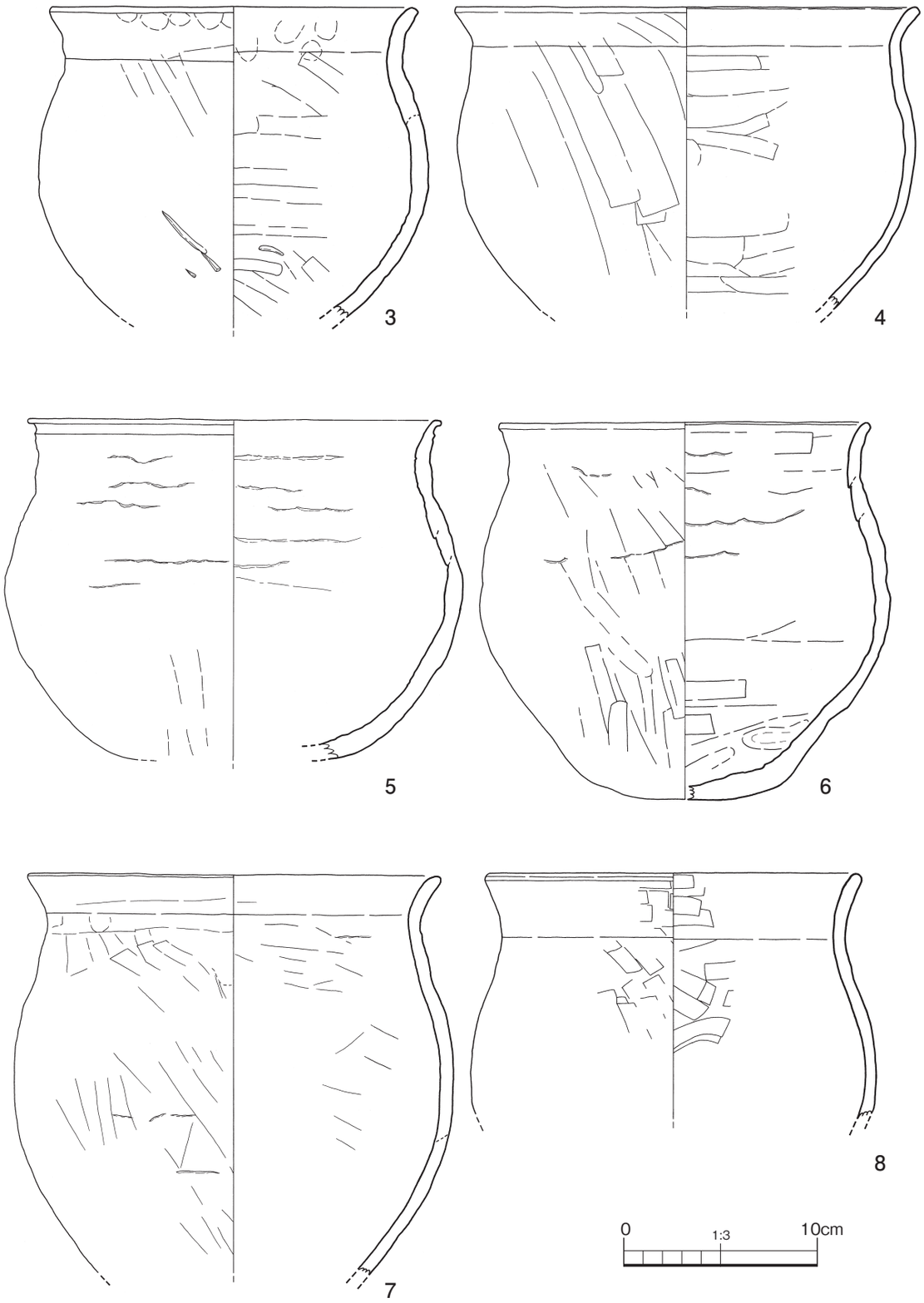
第７図　竪穴建物１内土坑と出土土器

第１項　竪穴建物

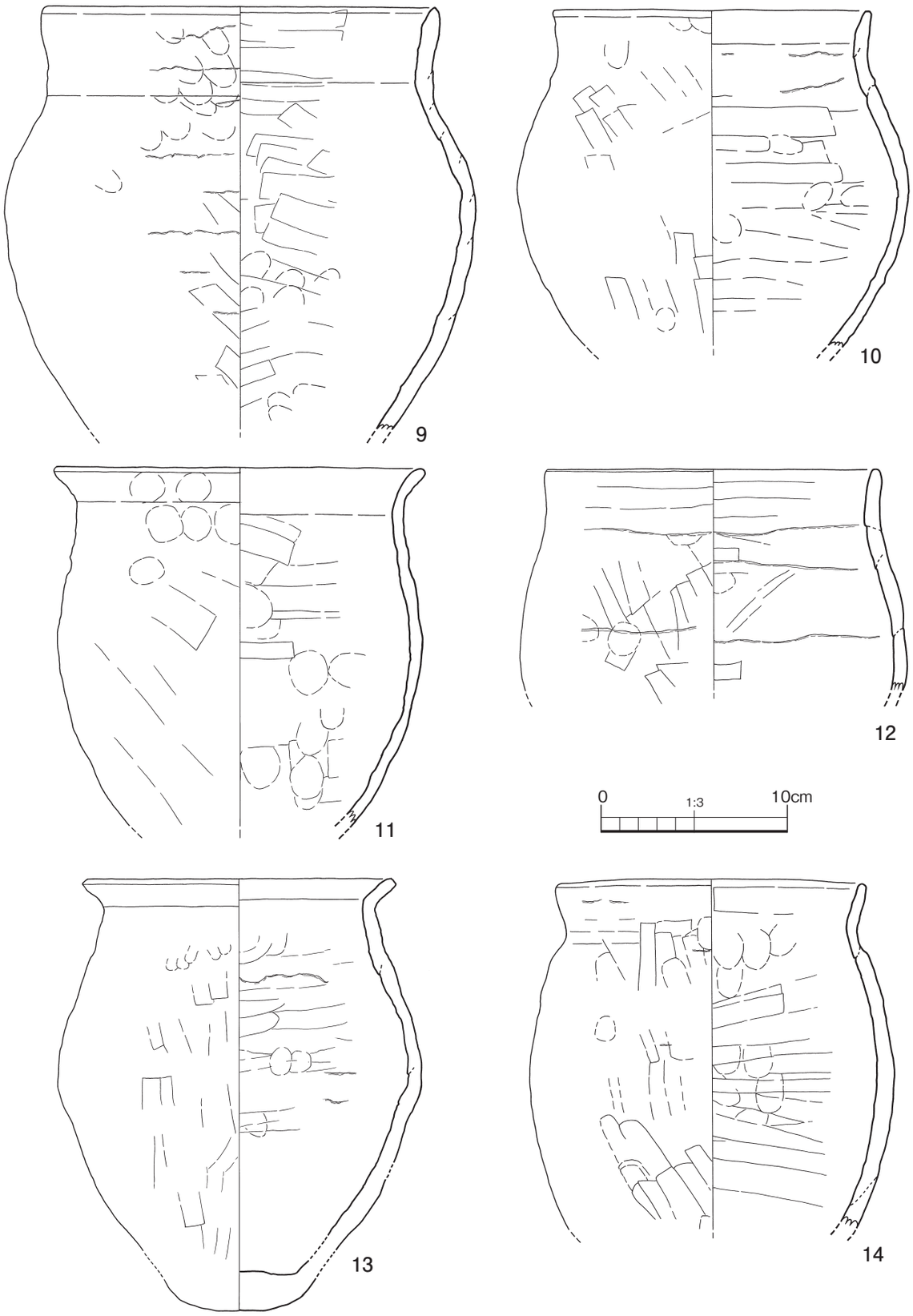
計５軒検出された。

竪穴建物１（第５図）

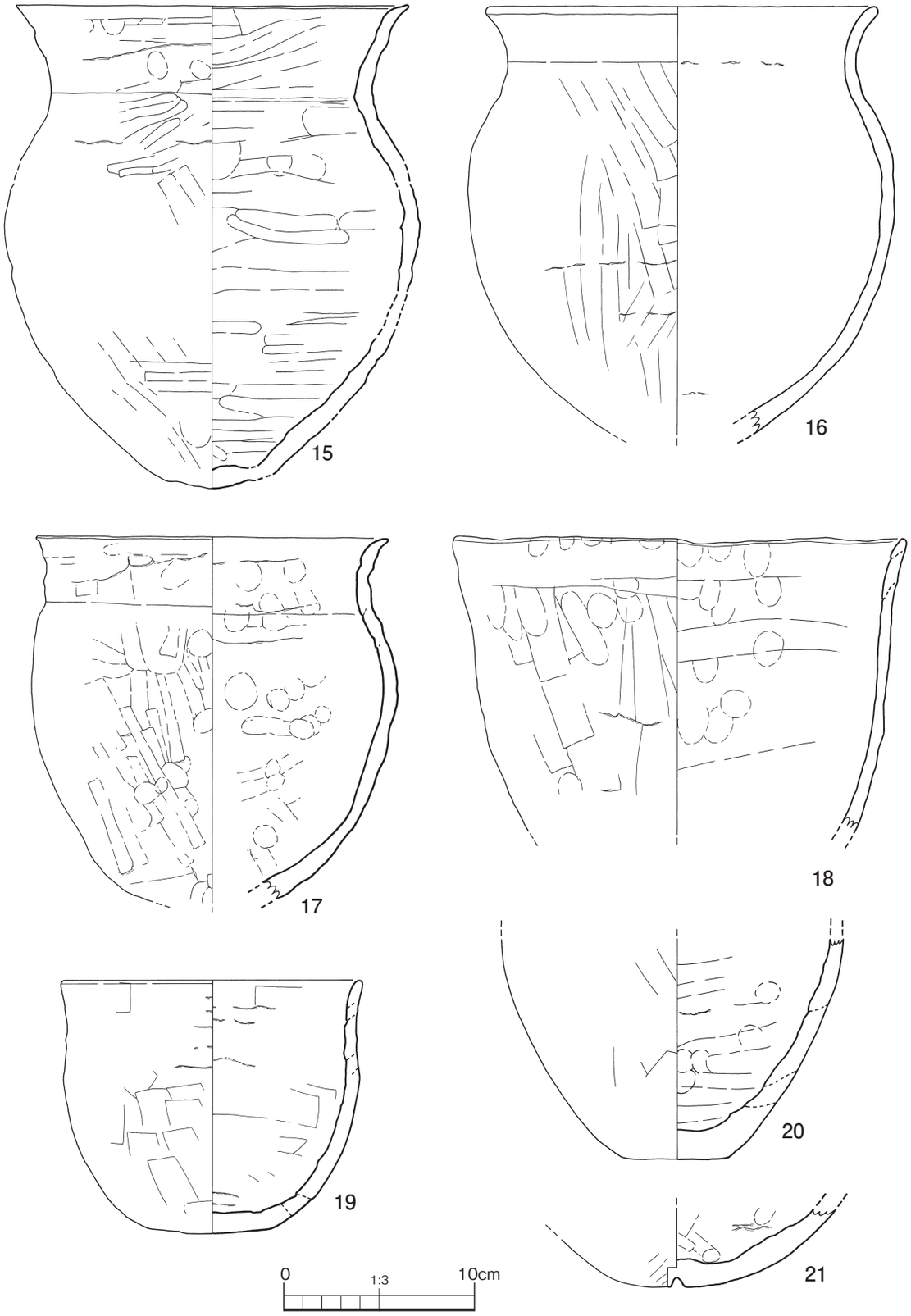
調査区北東部より、溝状遺構１、溝状遺構２に切られた状態で検出した。遺構の約３分の１が調査区より北へ伸びていたために、調査区を一旦拡張したうえで再度検出を行った。竪穴建



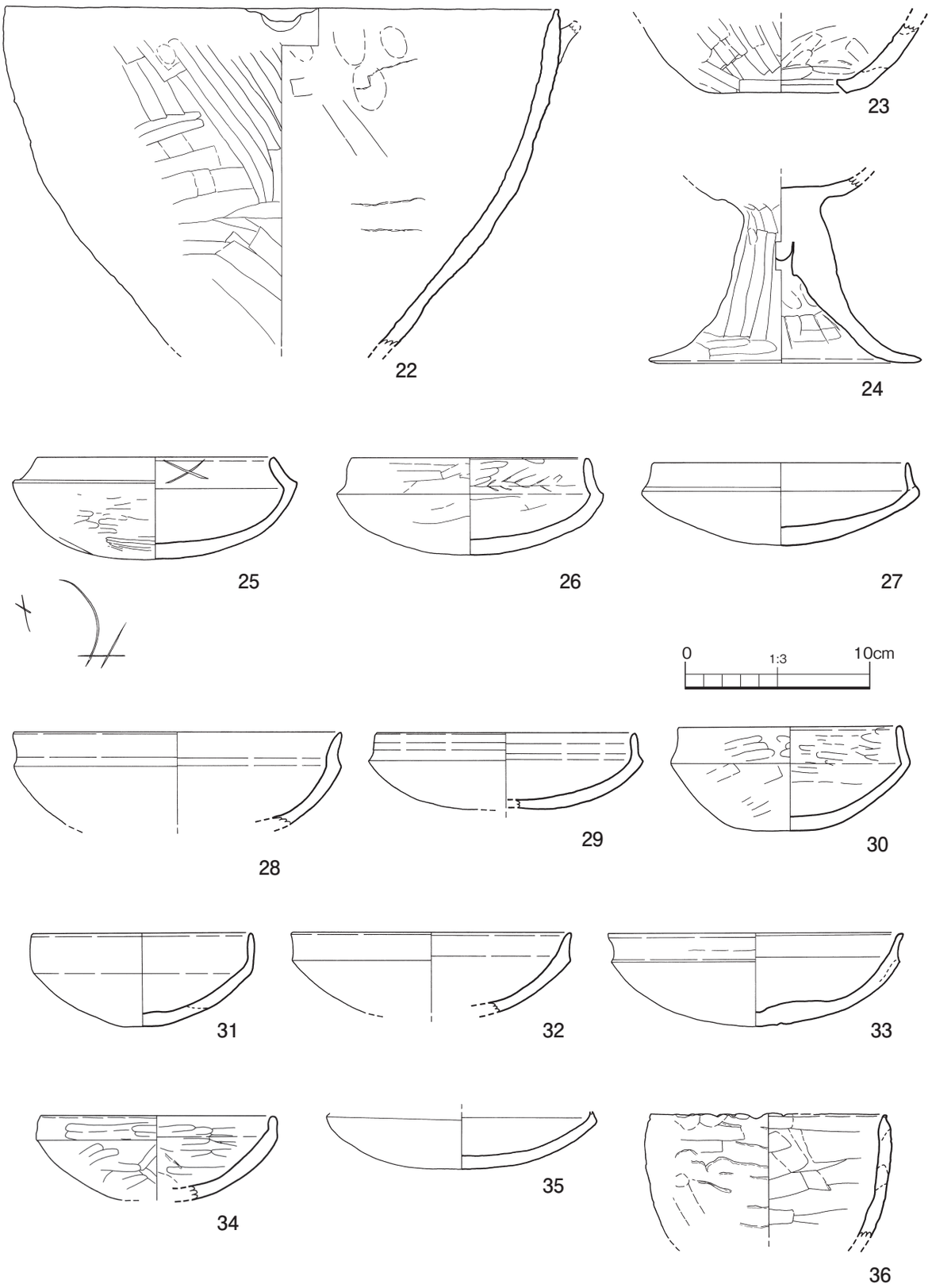
第８図　竪穴建物１内出土遺物実測図(1)（S=1/3）



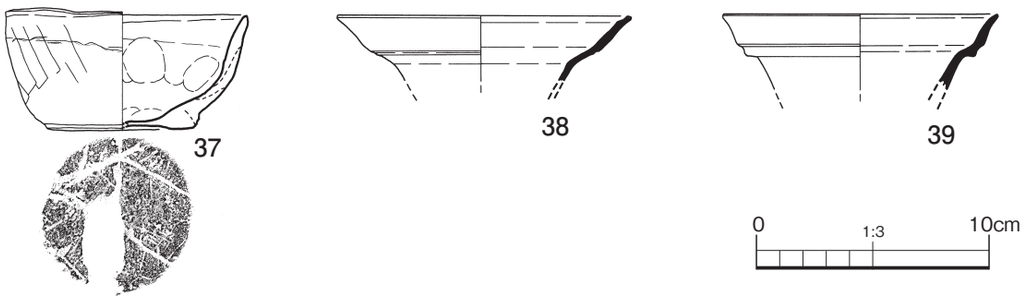
第９図　竪穴建物１内出土遺物実測図(2)（S=1/3）



第10図　竪穴建物１内出土遺物実測図(3)（S=1/3）



第11図　竪穴建物１内出土遺物実測図(4)（S=1/3）



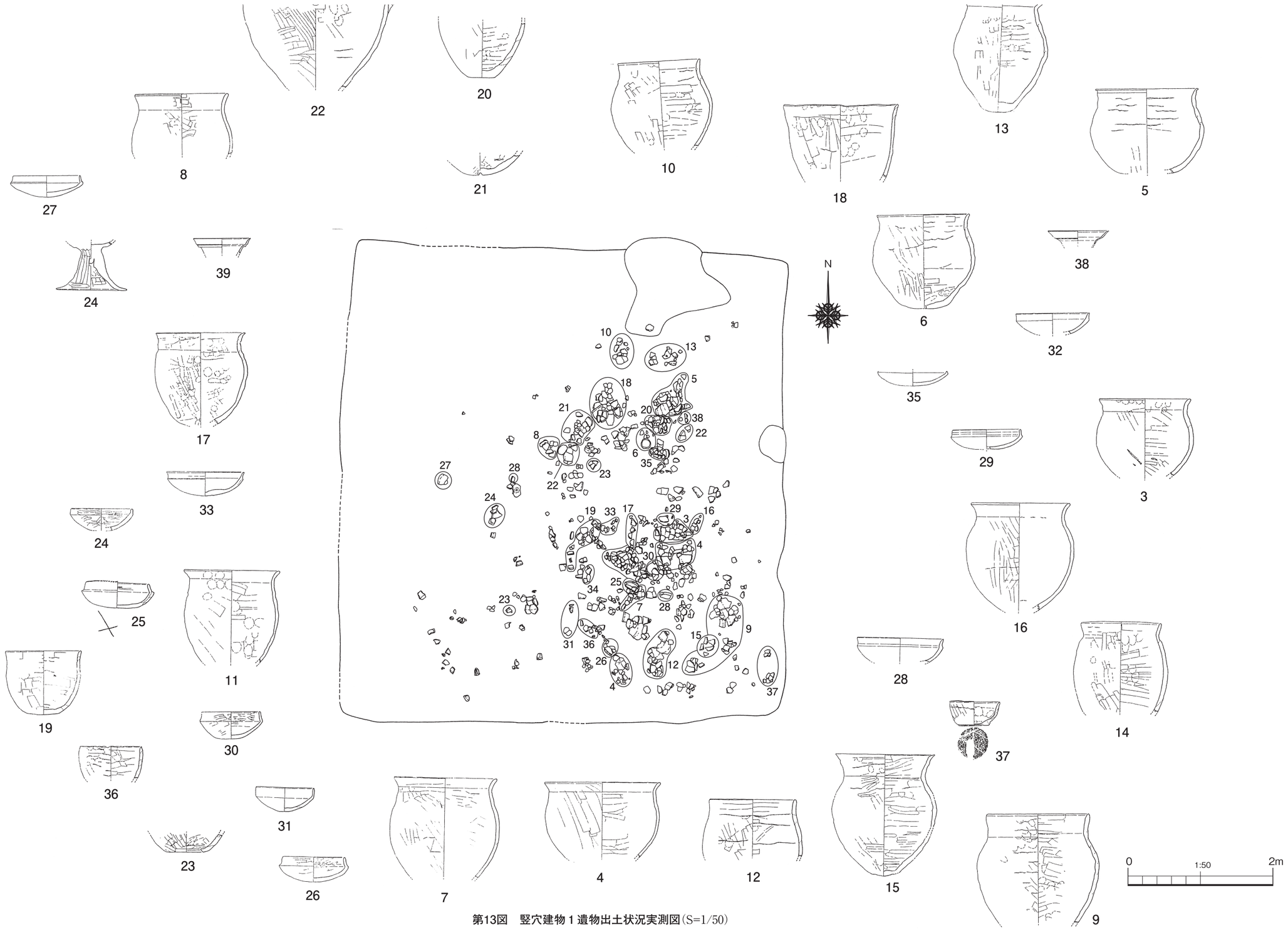
第12図　竪穴建物１内出土遺物実測図(5)（S=1/3）

物の形状は、南北6.6m×東西6.5mの方形である。深さは約30㎝と浅いが、これは現代の撹乱のために遺構を構築した面が削平された結果と考えられる。遺構を掘削したところ、埋土から夥しい量の遺物が出土した。遺物は、遺構中央よりやや東寄りを中心に出土しており、中心部は潰れた状態で出土し、接合の結果、ほぼ完形の状態で出土するものも少なくないことから、一括廃棄されたと考えられる。その状況は第13図に示したとおりである。土層断面を観察すると、遺構はまず黄褐色シルト質土の二次堆積層が遺構周縁部に堆積し、その後、遺物の廃棄に前後して暗褐色土が堆積し、埋没している。最初に堆積した黄褐色シルト質土が地山に似ることから、この土は竪穴建物の構築時に掘削され、周堤などに用いられた後、廃絶に伴って周縁から遺構内に落とした結果と考えられる。

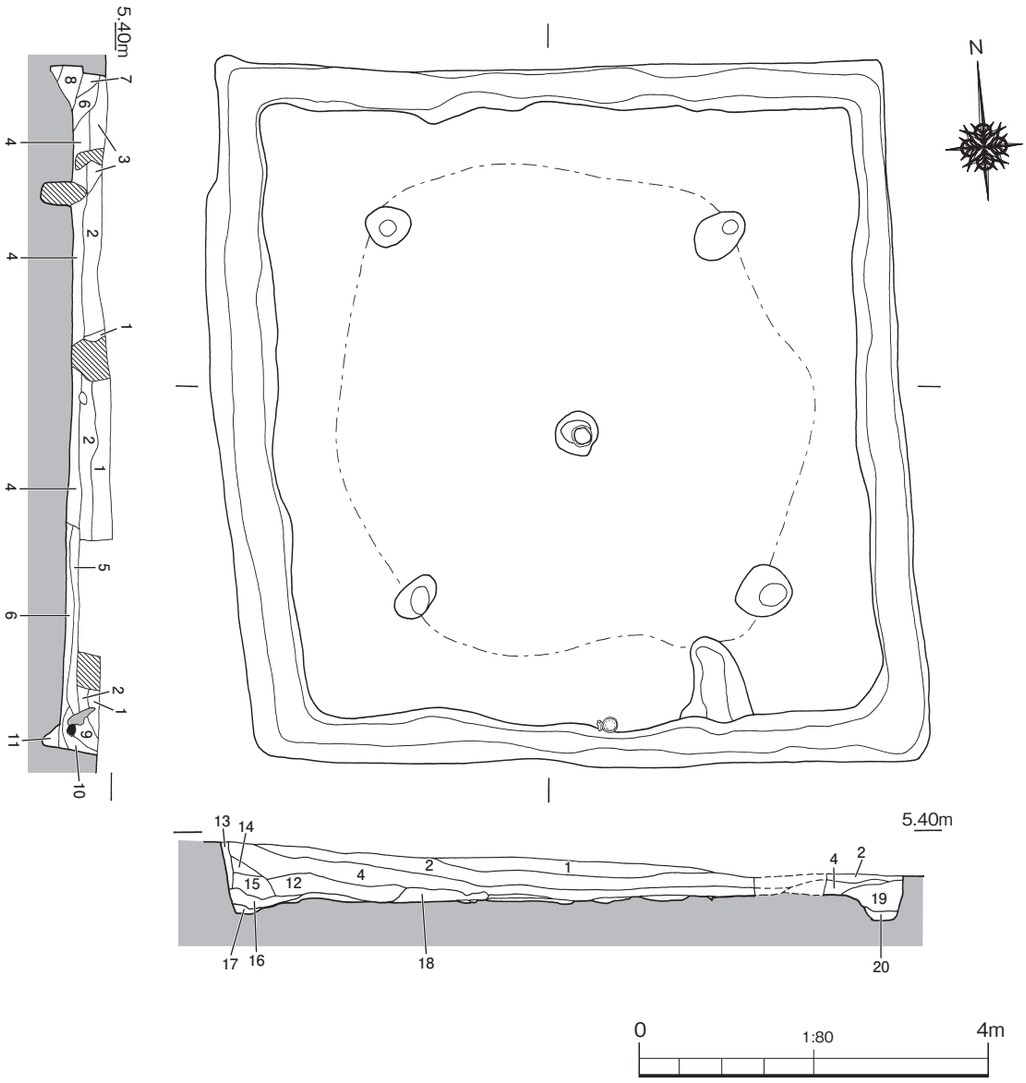
床面に貼床は認められず、中央やや南寄りの南北4.5m、東西４mの範囲に床面の硬化が認められた。この検出作業を進める過程で、中央部よりやや南東寄りから土器埋設炉が確認された（第６図）。埋設炉の掘方は径50㎝、深さ25㎝であり、埋設炉からは出土した土器は土師器であり、残存は胴部下半のみである。胴部が丸く、底部もほぼ丸底を呈する器壁の薄い甕であり、土器が埋設された状態で出土した。掘方の形状と土器の器形がほぼ一致することから、予め埋設する土器を決めたうえで掘削されたと考えられる。この埋設炉周辺も、炭化物や焼土を含む浅い掘り込みを確認した。竪穴建物南辺の中央部からは、歪な方形を呈する土坑が、竪穴建物南辺に対し隅が接する形で接触していた（第７図）。土坑は、検出面は1.2m×１mの台形に近い。形状を呈し、深さは約40㎝である。土坑は深くなるにつれ窄まり、底面は50㎝×40㎝の隅丸方形を呈している。土坑検出面付近からからは「×」字の窯印を持つ模倣坏が1点出土した。このほか、竪穴建物を構成する柱穴は4基検出された。径はいずれも20～25㎝、深さ約30㎝である。遺構周縁からは壁帯溝も認められた。壁帯溝は、幅約15㎝、床面からの深さ約10㎝未満である。

（３～39）は、竪穴建物１の埋土から出土した遺物である。主体は土師器であり、須恵器は（38、39）の二点のみであった。

（３～21）は甕である。（３～8）は口縁部が短く、胴部が球形に近い形状を呈する一群である。器面はヘラ状の工具で外面は斜方向、内面は横方向のナデを行う個体が多いが、中には（５）のように、ナデが殆ど認められず、粘土の継目が明瞭に残されるものもある。（９～13）は、口縁部が直交または外反し、口縁部の幅が短く、僅かく屈曲する胴部が最大径となる一群である。（14）は最大径部分の屈曲が極端に弱いため、長胴形を呈する可能性がある。（15～17）は、長い口縁部を特徴とする。（15）の胴部は（９～13）に近いが、（16･17）の胴部は球状を呈し

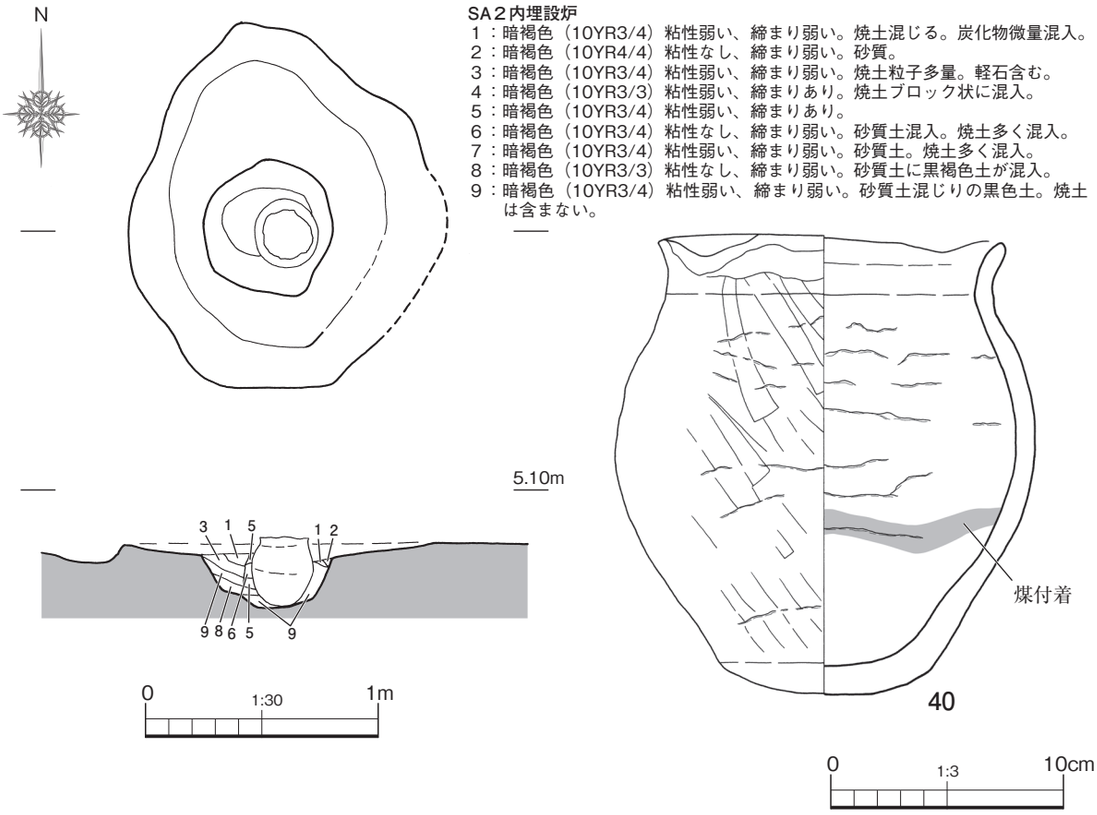


第13図　竪穴建物１遺物出土状況実測図(S=1/50)



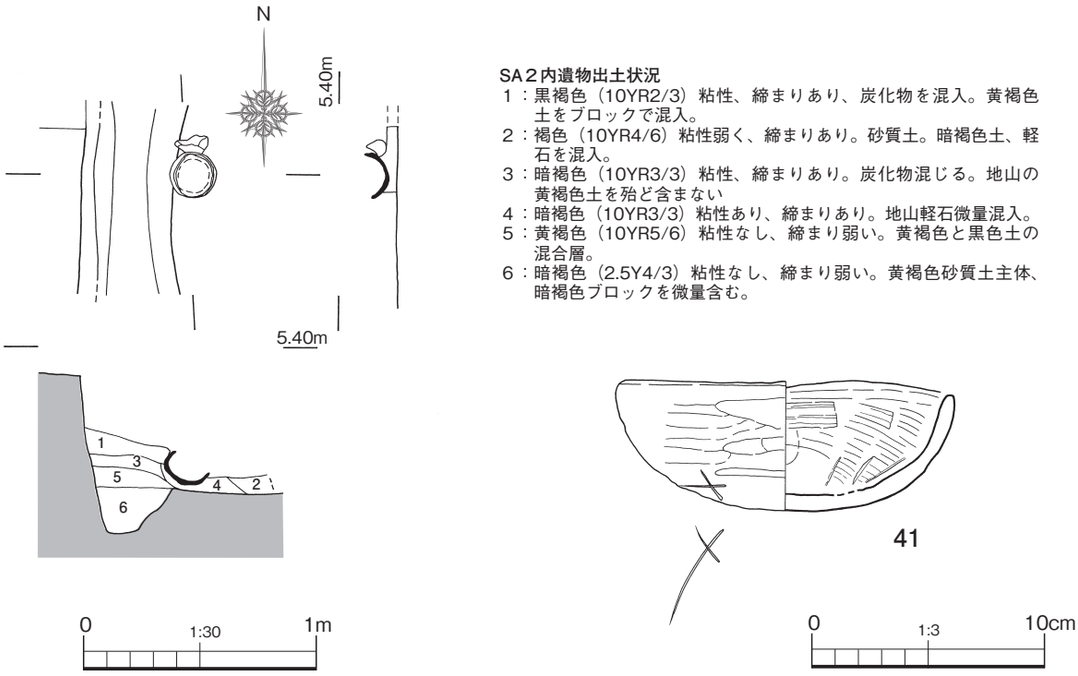
SA２
１：灰黄褐色（10YR4/2）暗褐色土を主体としながら黄褐色土が混入。他に白色粒子を多く混入。
２：にぶい黄褐色（10YR4/3）層中に白色粒子、黄褐色土を多量、焼土を微量含む。
３：灰黄褐色（10YR4/3）軟質。黄褐色土主体ながら暗褐色土を少量含む。
４：黄褐色（2.5Y5/3）黄褐色土の大小のブロックを主体。隙間に暗褐色。
５：にぶい黄褐色（2.5Y6/4）黄褐色土主体で暗褐色土が粒子単位で混入。層中は軽石を少量含む。
６：黄褐色（2.5Y5/3）黄褐色土主体。黄褐色粘質土の大小のブロックを混入。
７：暗灰黄色（2.5Y5/2）黄褐色土主体。黄褐色土は指先大のブロック状を少量、黄褐色土と暗褐色土で斑紋を形成。
８：黄灰色（2.5Y4/1）黄褐色土と暗褐色土が粒子状にほぼ等量混入。黄褐色土の指先代のブロック混入。
９：灰黄褐色（2.5Y5/3）黄褐色砂層主体で暗褐色土が粒子単位で少量含む。炭化物少量混入
10：黒褐色（10YR3/1）黒褐色主体で暗渇色を少量混入。斑紋を形成。
11：灰黄褐色（2.5Y5/3）黄褐色砂層主体で暗褐色土が粒子単位で少量含む。炭化物少量混入。
12：暗灰黄色（2.5Y4/2）黄褐色砂層、暗褐色土、黒褐色土の混合層。軽石を少量含む。斑紋を形成。
13：にぶい黄褐色（10YR5/3）暗褐色土と黄褐色土の混合層、軽石少量含む。
14：にぶい黄褐色（10YR6/3）暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土の混合層
15：暗灰黄色（2.5Y5/2）黄褐色＋暗褐色土が粒子状に混合、斑紋を形成。軽石を微量含む。
16：黒褐色（10YR黒褐3/1）硬く締まっている。黒色土の単純層。
17：黒褐色（10YR3/2）黒色土中に黄褐色土が混入。斑紋を形成。
18：にぶい黄褐色（2.5Y6/4）黄褐色砂層主体で暗褐色土が粒子として少量混入。軽石を少量含む。
19：にぶい黄褐色（10YR5/3）黄褐色土と暗褐色土の混合層。斑紋を形成。
20：暗褐（10YR4/4）粘性弱く締まり弱い。19層を主体とし赤褐色粒子を混入。

第14図　竪穴建物２実測図(S=1/80)



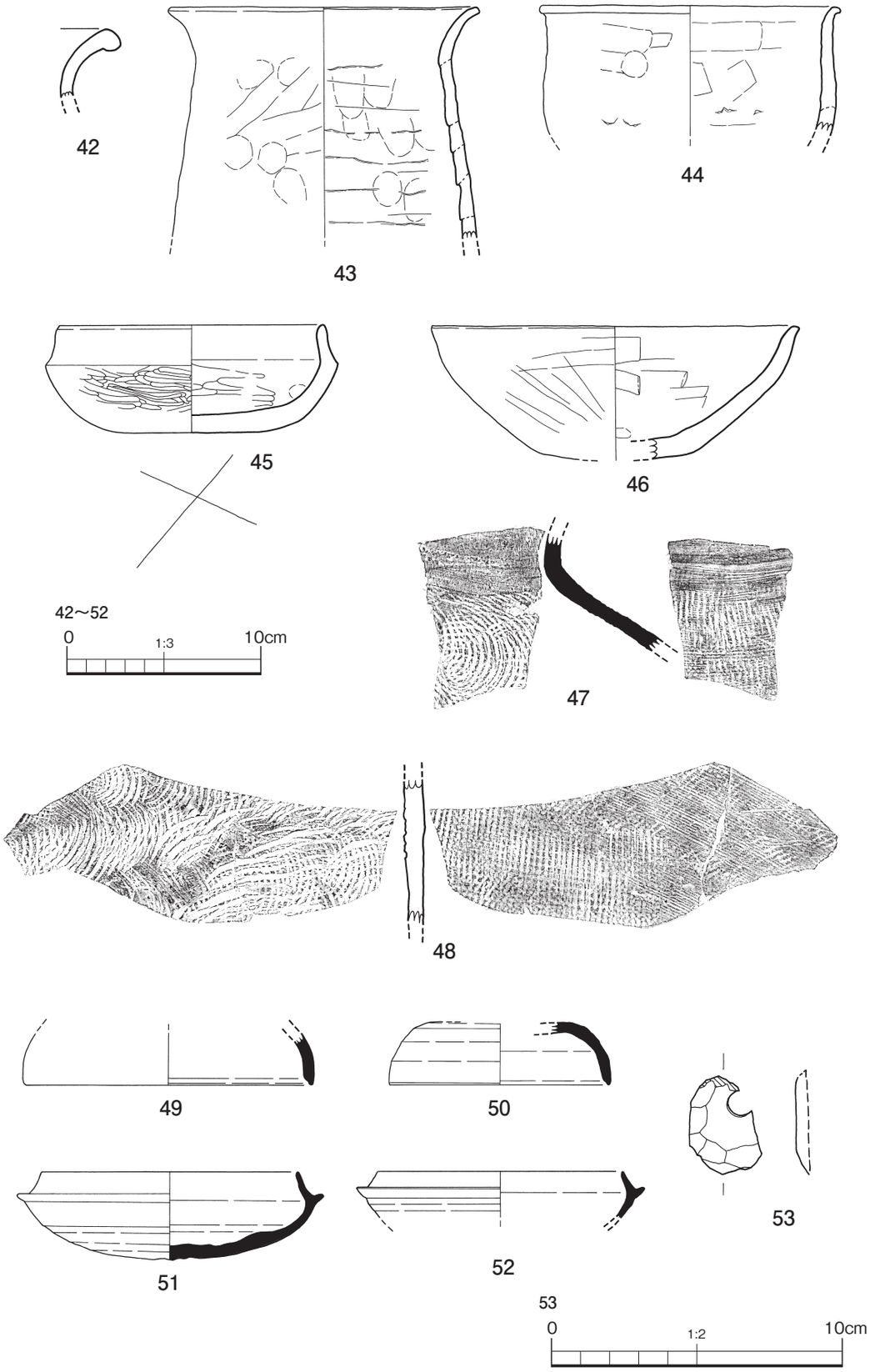
SA２内埋設炉
１：暗褐色（10YR3/4）粘性弱い、締まり弱い。焼土混じる。炭化物微量混入。
２：暗褐色（10YR4/4）粘性なし、締まり弱い。砂質。
３：暗褐色（10YR3/4）粘性弱い、締まり弱い。焼土粒子多量。軽石含む。
４：暗褐色（10YR3/3）粘性弱い、締まりあり。焼土ブロック状に混入。
５：暗褐色（10YR3/4）粘性弱い、締まりあり。
６：暗褐色（10YR3/4）粘性なし、締まり弱い。砂質土混入。焼土多く混入。
７：暗褐色（10YR3/4）粘性弱い、締まり弱い。砂質土。焼土多く混入。
８：暗褐色（10YR3/3）粘性なし、締まり弱い。砂質土に黒褐色土が混入。
９：暗褐色（10YR3/4）粘性弱い、締まり弱い。砂質土混じりの黒色土。焼土は含まない。

第15図　竪穴建物２内土器埋設炉と出土土器

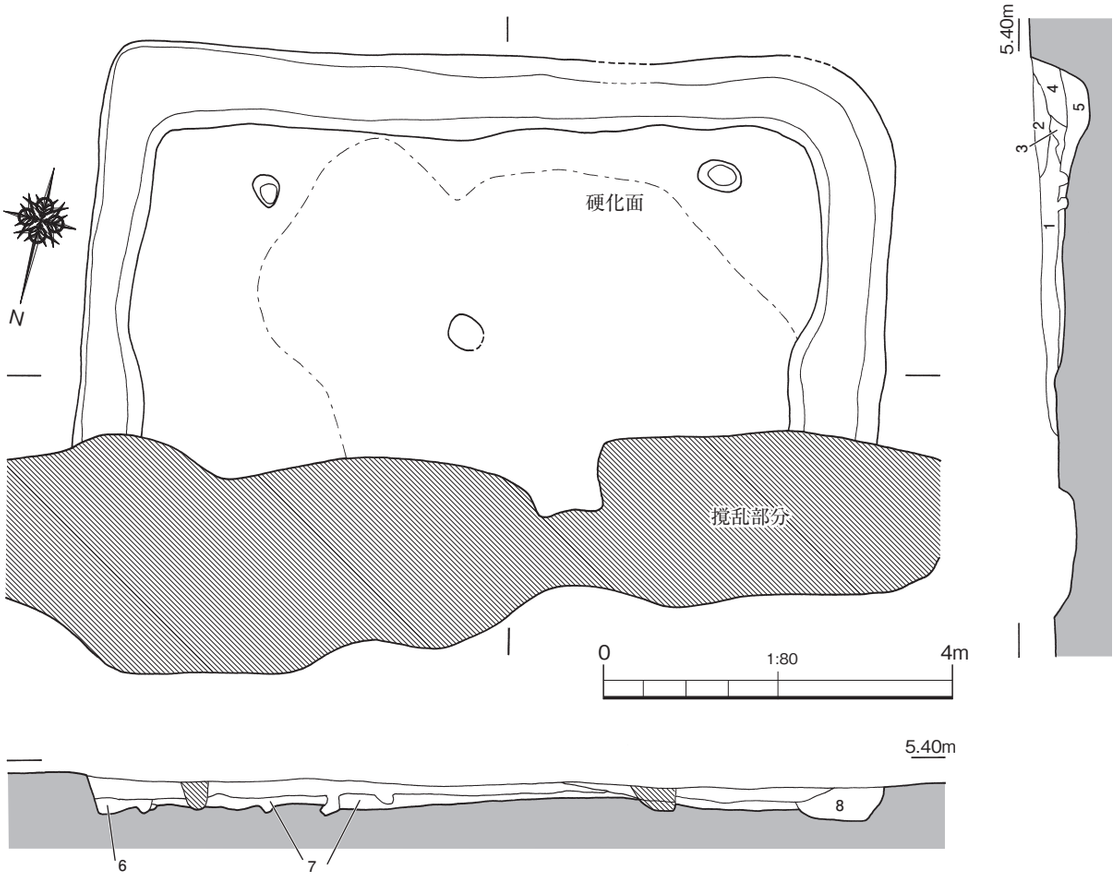


SA２内遺物出土状況
１：黒褐色（10YR2/3）粘性、締まりあり、炭化物を混入。黄褐色土をブロックで混入。
２：褐色（10YR4/6）粘性弱く、締まりあり。砂質土。暗褐色土、軽石を混入。
３：暗褐色（10YR3/3）粘性、締まりあり。炭化物混じる。地山の黄褐色土を殆ど含まない
４：暗褐色（10YR3/3）粘性あり、締まりあり。地山軽石微量混入。
５：黄褐色（10YR5/6）粘性なし、締まり弱い。黄褐色と黒色土の混合層。
６：暗褐色（2.5Y4/3）粘性なし、締まり弱い。黄褐色砂質土主体、暗褐色ブロックを微量含む。

第16図　竪穴建物２内遺物出土状況と出土土器



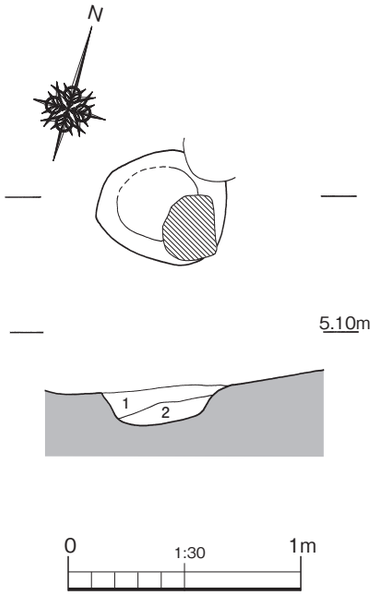
第17図　竪穴建物２内出土遺物実測図（S=土器：1/3, 石器：1/2）



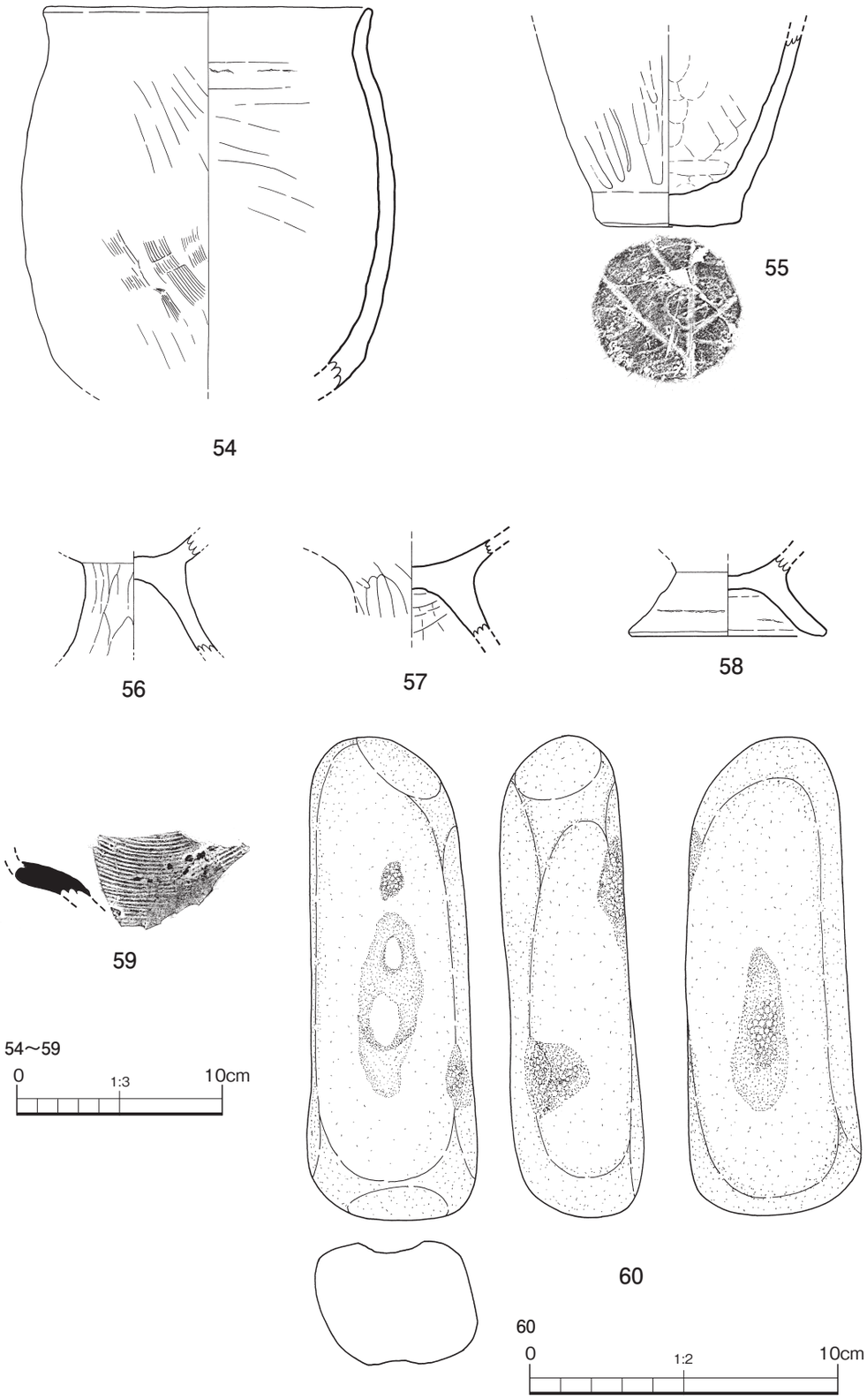
第18図　竪穴建物３実測図（S=1/80）

SA３
１：にぶい黄褐色（10YR6/4）硬く締まっている。黄褐色主体でわずかに暗褐色が混じる。僅かに斑紋を形成。
２：明灰黄色（2.5Y4/2）やや硬く締まっている。暗褐色土主体の層。黄褐色土は微量。
３：黄褐色（2.5Y5/4）黄褐色砂層主体。暗褐色土を粒子単位で混入。
４：オリーブ褐色（2.5Y5/4）やや軟質。暗褐色土主体。黄褐色土微量含む。斑紋なし。
５：暗灰黄色（2.5Y4/2）やや軟質。黄褐色土主体で一部黒色混入。
６：暗灰黄色（2.5Y4/2）やや軟質。暗褐色土を主体とし黄褐色土が混入。
７：明黄褐色（(2.5Y5/2）軟質。暗褐色土と黄褐色土の混合。黒色土の小ブロックを混入。
８：黒褐色(2.5Y3/2)黒色土主体。暗褐色土を含む。黄褐色土のブロックを含む。

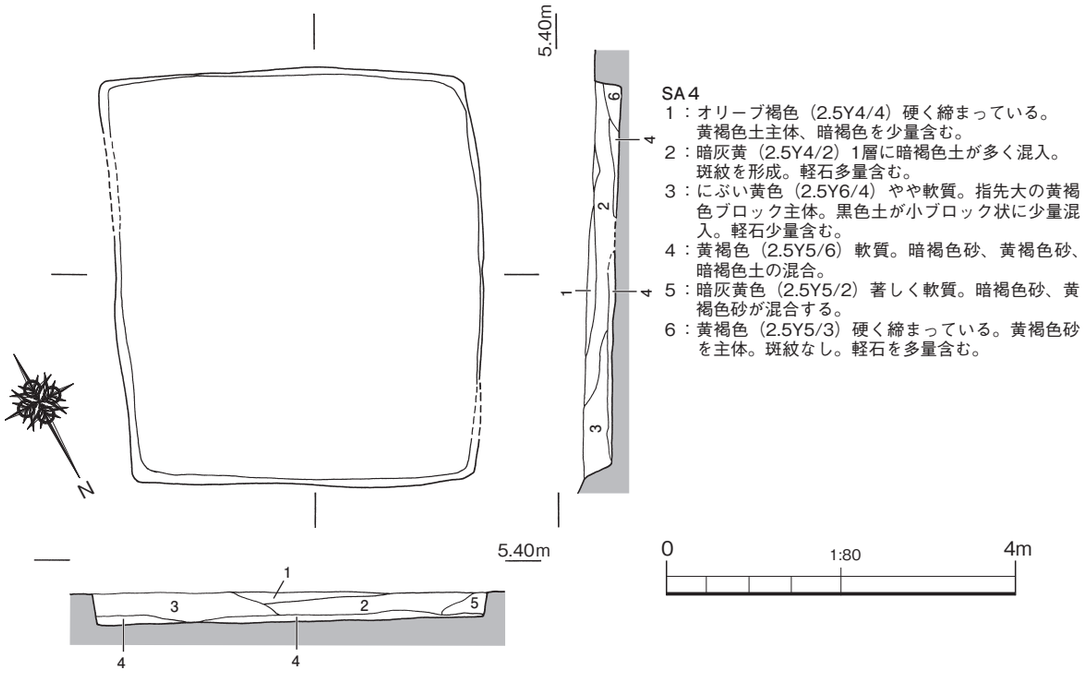
SA３内土坑
１：黒褐色（5YR4/2）軟質。焼土と炭化物の小片が多量に混入。
２：にぶい黄褐色（10YR5/3）軟質。黄褐色土（地山層）に暗褐色土が混入。



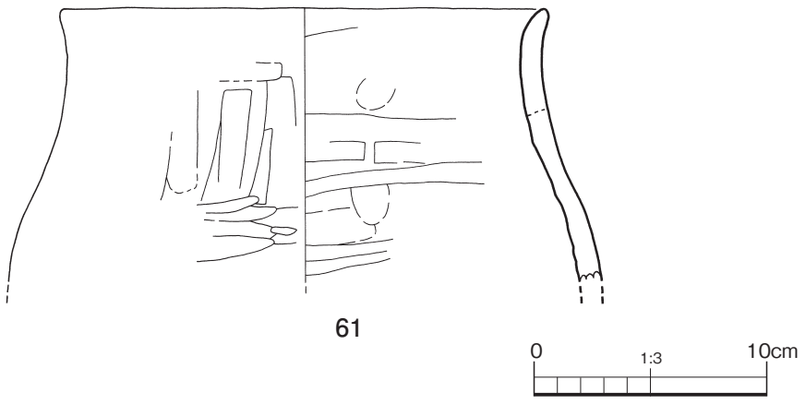
第19図　竪穴建物３内土坑実測図
（S=1/30）



第20図　竪穴建物３内出土遺物実測図（S=土器：1/3, 石器：1/2）

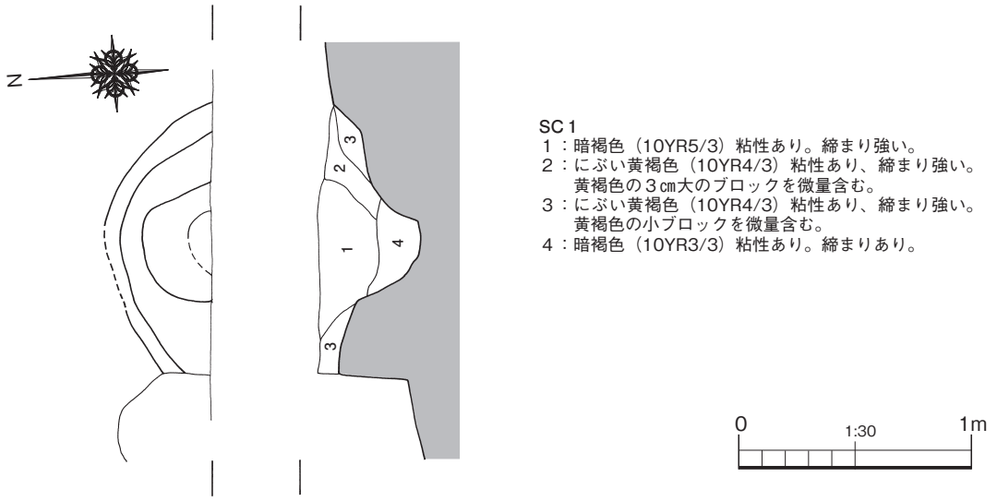


第21図　竪穴建物４実測図(S=1/80)

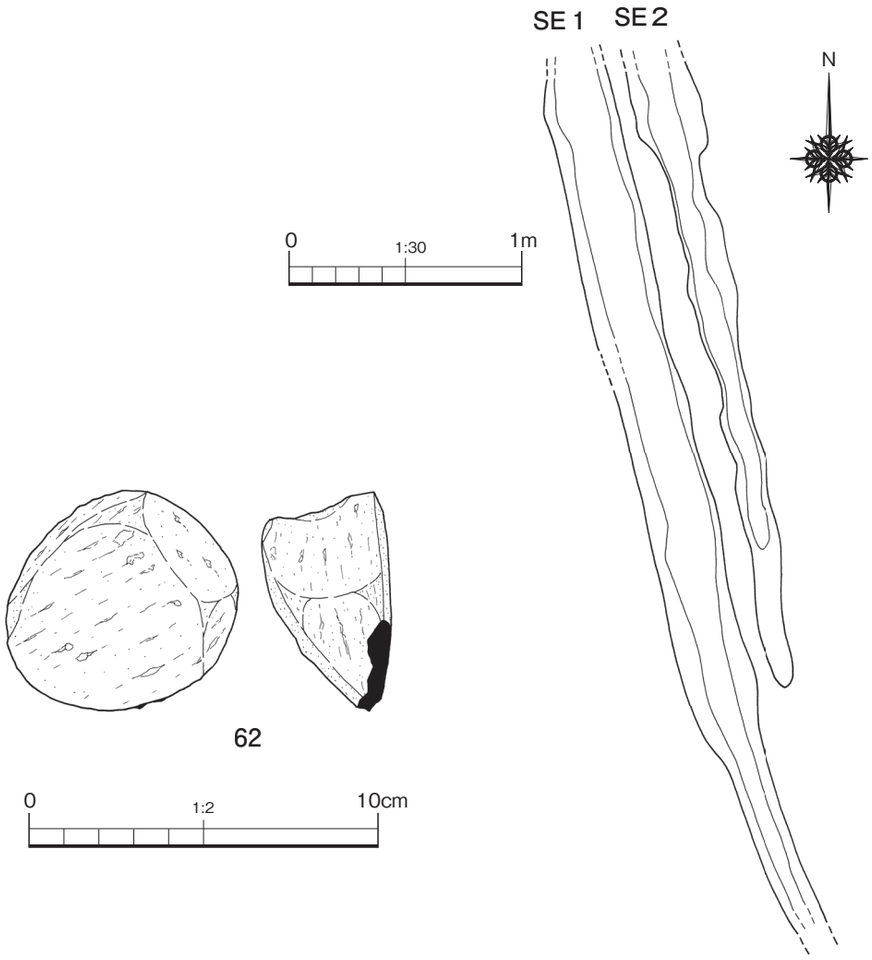


第22図　竪穴建物４内出土遺物実測図(S=1/3)

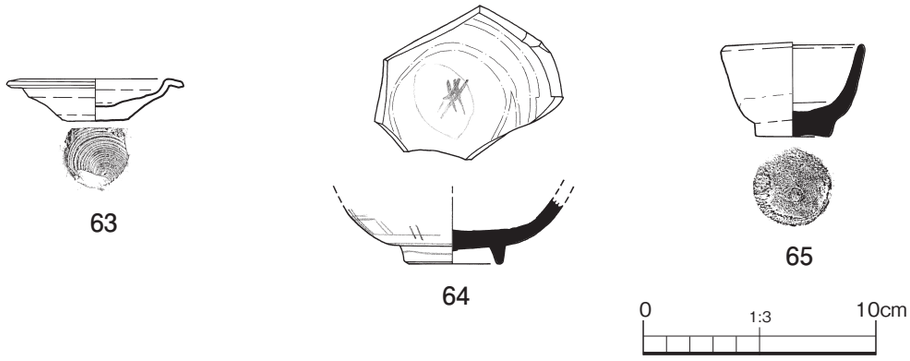
ており、（３～８）に近い。（18）は口縁部と頸部、胴部の境界が曖昧である。底部の形態は不明である。（19）は小型甕である。（20･21）は底部である。（20）の胴部の含まりは弱く、（９～13）に近い胴部形態と考えられる。（21）の底部は丸底に近い。（22･23）は、甑である。（22）は類似した形状から甑と判断したが、(23)は底面を持たない器形であることから判断した。(24)は高坏である。脚部は上半部分でやや膨らみ、脚部の外面は縦方向のミガキが盛んに行われる。（25～35）は模倣坏である。須恵器の坏に比べて全体的に器壁が厚く、器形は、（25･26）は須恵器の坏に近いが、その外の器形は、特に口縁部断面形において須恵器とは隔たりがある。また、磨耗により明確でないものもあるが、基本的に器面にヘラによる研磨が行われる。なお(25)は底部と口縁部内面に窯印が認められる。（36、38）は小型鉢である。（37）は底部に木葉の圧



第23図　土坑１実測図(S=1/30)



第24図　溝状遺構１，２実測図(S=1/30)



第25図　表土出土遺物実測図(S=1/3)

痕が認められる。(38、39) は須恵器である。どちらも小型短頸壺と考えられる。

竪穴建物２（第14図）

調査区中央部付近より検出した。南北7.6m×東西８mの方形を呈しており、検出面から床面までの深さは約55㎝と深く、Ⅲ層の上面まで掘り込まれていた。埋土中は、下層を中心に遺物が出土したが、出土は少量であり、竪穴建物１のような一括廃棄は確認されなかった。遺構は竪穴建物1と同様に貼床を伴わず、中央より径5.5mの範囲より、床面の硬化が認められた。床面の検出を進める過程で、遺構のほぼ中央部において土器埋設炉が確認された（第15図)。埋設炉の掘方は径約55㎝、深さ約30㎝であり、土器は掘方の北側に寄って出土した。南側は北側より一段高くなっており、焼土が集中することから、南側は土器の燃焼施設と考えられる。なお、埋設炉の掘り方の周囲は、110㎝×90㎝、深さ10㎝、炭化物や焼土を埋土とする浅い土坑を確認した。(40) は埋設された甕である。口縁部を使用時に打ち欠いた以外はほぼ完形で出土しており、最大径が胴部中部になる特徴と、胴部が球形を呈する特徴の双方を兼ね備えている。このほか、柱穴は4基検出された。径は20～25㎝、深さ約35～40㎝である。また、遺構周縁には壁帯溝も認められた。壁帯溝は、幅50㎝、床面からの深さ約20㎝である。遺構西辺の土層断面には、竪穴建物の壁面に沿うように13層が認められ、その下位の16、17層には黒色土の堆積が認められた。13層の垂直の堆積と、黒褐色を呈する14～17層の色調は特徴的である。なお、遺構南辺の中央部からは、４層の中に、「×」字のヘラ記号を持つ模倣坏（41）が埋まった状態で出土した（第16図)。(41) は外面にミガキ、内面に櫛描き状の工具による調整が認められる。

(42～53) は、竪穴建物2内の出土遺物である。(42～44) は甕である。(43) は、長胴化した一群であり、内面は継ぎ目が明確である。(44) は中型、もしくは小型の甕であり、胴部が球形に近くなる。(45) は、「×」印のヘラ記号が底面に記された模倣坏である。(46) も模倣坏と考えられるが、口縁部の段をほぼ失っている。(47、48) は、須恵器の甕である。内面に同心円の敲目が認められるが、外面は平行タタキ目である。(49～52)は、須恵器の坏である。(53) は結晶片岩を磨いて製作した石製紡錘車である。完成後、穿孔部分の外面が節理面より剥離している。

竪穴建物３

調査区北西部より、北側を現代のゴミ穴に切られた状態で検出したため、確認できたのは竪穴建物の南側３分の１程度である。形状は南北8.9mであり、隅丸方形を呈していたと考えられる。遺構は、本来ゴミ穴より北まで伸びていたはずだが、竪穴建物３が検出された調査区北西部は現代の削平が著しく、検出された南側も床面までの深さが15㎝未満であったため、ゴミ穴より北側は既に削平の際に消滅したと考えられる。床面は貼床が認められなかったが、外縁を除くほぼ全面が硬化していた。柱穴は２基検出された。径は20～25㎝、深さ約15㎝である。遺構周縁に認められた壁帯溝は、幅約1m、床面からの深さは15㎝前後であり、他の竪穴建物に比べ規模が大きい。遺構南側は、径約50㎝、床面からの深さ15㎝の土坑が確認され（第19図）、埋土内からは土器（54）が出土した。埋土中に焼土が認められないことや、破片を埋納したような出土状況から、土器埋設炉というより、祭祀に関連した遺構と考えられる。

（54～60）は、竪穴建物3内の出土遺物である。（54、55）は甕である。（54）は口縁部が短く、長胴を呈する。（55）は胴部下半から底部である。器形から、胴部の長い一群に属するものと考えられる。底面には、製作時に敷いていたと見られる木葉の圧痕が認められる。（56～57）は、高坏の脚部である。（58）は坏の脚部である。（59）は須恵器である。外面にカキ目が認められることから、瓮と考えられる。（60）は、断面が隅丸の平行四辺形を呈する砂岩製の礫である。両面の中央には敲打の結果と見られる凹みが認められるほか、敲打の痕跡は縁辺部にも一部認められる。

竪穴建物４

調査区南西部より検出した。形状は南北4.8m×東西3.7mの方形であり、検出面から床面までの深さは約35㎝である。柱穴は確認されなかったが、このような平面形から竪穴建物と判断した。遺構内に土器埋設炉等の付帯施設は確認されなかったが、遺構中央よりやや南側に現代の大規模な撹乱が認められており、この位置に埋設され、後世の撹乱により消失した可能性も考えられる。床面に貼床は認められなかったが、明確な硬化面もなかった。

（61）は竪穴建物4埋土中の出土遺物である。口縁部はやや窄まり、胴部で広がる、非常に大型の甕である。

竪穴建物５

調査区南端部より、工事立会いの際に掘削部分の断面より確認された。そのため、形状、サイズは不明であるが、断面部分の長さは7.2m、深さは約40㎝である。断面で確認できた遺物はなかった。

第２項　土坑

１基検出した。

土坑１（第23図）

調査区やや東寄り、竪穴建物2の北に隣接して検出した。現代の撹乱で遺構西端部を消失している上に、試掘調査時に遺構の約半分を失ったため、全体の形状が不明だが、平面形は本来約1.2mの円形と想定される。土層断面を見ると、途中段を持ちながら下半部は円錐形を呈する。遺構内の出土遺物がないため用途は不明である。

第１表　出土土器観察表（１）

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	法量（）：復元			色調		焼成	調整		胎土（上：mm、下：量）				備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	
7	6	1	SA 1	土師器甕				にぶい褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	良好	ナデ	指押え、指ナデ	5 多				埋設炉出土 外面煤付着
	7	2	SA 1	土師器模倣坏	(7.0)	(4.2)	(5.5)	にぶい橙 7.5YR6/4	明褐灰 7.5YR7/1	良好	回転ナデ	回転ナデ		1 多			屋内土坑出土 内面全体に朱
8	8	3	SA 1	土師器甕	(19.0)			にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 7.5YR4/2	良好	ナデ、指押え、工具痕	ナデ、指押え、工具痕	5.5 多	1.5 少			磨耗激しい
		4	SA 1	土師器甕				明褐 7.5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	工具によるナデ	ナデ	2 少				
		5	SA 1	土師器甕	(21.0)			明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	良好	横ナデ、工具ナデ	横ナデ、ナデ	5 多				接合痕有
		6	SA 1	土師器甕	(18.8)	7.2	(19.4)	橙 5YR6/8	橙 7.5YR6/6	良好	横ナデ、斜ナデ	横ナデ、指ナデ	2 多				外面に煤付着 内面に黒斑
		7	SA 1	土師器甕	(11.4)			明褐灰 5YR7/2	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	工具ナデ	工具ナデ	2 中				
		8	SA 1	土師器甕	(18.7)			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	良好	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	3 多	1 多			内面に黒斑
9	9	9	SA 1	土師器甕	(20.8)			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	良好	工具ナデ、指押さえ	工具ナデ、指押え	6 多	1 僅			内面に黒斑
		10	SA 1	土師器甕	(17.0)			にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	横ナデ、工具ナデ、指押え	横ナデ、指押え、工具ナデ	4 多	1 少			外面磨耗激しい 接合痕有
		11	SA 1	土師器甕	(19.6)			灰褐 5YR4/2	褐 7.5YR4/3	良好	横ナデ、指押え	工具ナデ、ナデ、指押え	5 多	1.5 多			
		12	SA 1	土師器甕	17.7			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 7.5YR6/4	良好	指ナデ、横ナデ、工具ナデ、指押え	指押え、工具ナデ	7.5 多				外面に煤付着
		13	SA 1	土師器甕	(16.4)	7.0	22.9	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 5YR7/4	良好	横ナデ、指押え、縦ナデ	横ナデ、指押え	4 多				
		14	SA 1	土師器甕	(16.0)			にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 5YR4/2	良好	ナデ、指押さえ、ケズリ	指押え、ナデ	5 多				
10	10	15	SA 1	土師器甕	(25.2)	(4.6)	(20.4)	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	良好	指ナデ、指押え。工具ナデ	指押え	1 多				
		16	SA 1	土師器甕	(19.7)			橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR6/6	良好	横ナデ、斜ナデ	横ナデ	5 多				外面に煤付着 植物の繊維圧痕
		17	SA 1	土師器甕	18.3			橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	指押え、工具ナデ、ケズリ	指押え、横ナデ	4 多				接合痕有
		18	SA 1	土師器甕	23.5			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	横ナデ、指押え、工具痕	ナデ、指押さえ	6.5 多				接合痕有
		19	SA 1	土師器小型甕	(15.3)	6.5	13.2	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	工具ナデ、ナデ	工具ナデ、ナデ	5.5 多	2.5 少			
		20	SA 1	土師器甕				灰黄褐 10YR5/2	灰白 7.5YR5/2	良好	鉄分付着	工具ナデ	2 多				
		21	SA 1	土師器甕				にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 5YR4/4	良好	指押え、ナデ	ナデ	6 多	6 多			底部の凹みは圧痕
11	11	22	SA 1	土師器甑	(30.0)			にぶい赤褐 2.5YR4/3	にぶい赤褐 5YR4/3	良好	指ナデ、横ナデ、横ケズリ	指押え、ナデ	4 多	1 少			接合痕有、 内面磨耗、黒斑
		23	SA 1	土師器甑		(7.1)		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	ケズリ	ナデ	2 少	1 僅			
		24	SA 1	土師器高坏		(14.6)		にぶい赤褐 5YR5/4	灰黄褐 10YR5/2	良好	工具縦ナデ、ミガキ、ナデ	縦ナデ、工具ナデ、横ナデ		7.5 僅			
		25	SA 1	土師器模倣坏	12.7	4.5	5.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	回転ナデ、ミガキ、ナデ	回転ナデ、ナデ、指押え		微少			窯印あり （内外面）
		26	SA 1	土師器模倣坏	12.8	4.5		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	横ナデ	ミガキ、工具痕、ナデ		2 多			
		27	SA 1	土師器模倣坏	(13.8)		4.3	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	良好	ナデ	ナデ	2.5 僅				磨耗激しい
		28	SA 1	土師器模倣坏	(17.6)			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	回転ナデ	剥離により不明		微少			
		29	SA 1	土師器模倣坏	(13.8)			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR5/4	良好	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ		微多			
		30	SA 1	土師器模倣坏	(12.0)	(2.8)	(5.6)	灰白 5YR8/7	にぶい赤褐 7.5YR5/4	良好	回転ナデ、ミガキ	回転ナデ、ミガキ	1.5 少				内面に黒斑
		31	SA 1	土師器模倣坏	(11.8)	(1.9)	(5.0)	明褐灰 7.5YR7/1	灰黄褐 10YR4/2	良好	磨耗により不明	回転ナデ、丁寧なナデ					接合痕有 内面に黒斑

第２表　出土土器観察表（２）

掲載頁	図番号	掲載番号	出土遺構	種別器種	法量（）：復元			色調		焼成	調整		胎土（上：mm、下：量）				備考
					口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面	A	B	C	D	
11	11	32	SA 1	土師器模倣坏	(15.0)			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ		微多			外面に黒斑
		33	SA 1	土師器模倣坏	16.0	4.3	5.0	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	回転ナデ、ナデ、指ナデ	回転ナデ、ナデ		1少	1少		
		34	SA 1	土師器模倣坏	12.6			にぶい橙 5YR6/4	にぶい赤橙 5YR5/3	良好	横ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ	7微		1多		
		35	SA 1	土師器模倣坏				灰白 5YR8/2	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	磨耗により不明	磨耗により不明	4少				
		36	SA 1	土師器鉢	12.6			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	良好	工具ナデ、ナデ、指押え	工具ナデ	0.5少	1僅			
12	12	37	SA 1	土師器	10.4	6.4	5.1	にぶい赤褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR4/3	良好	ナデ、横ナデ、工具ナデ	ナデ、指押え、横ナデ	4.5少				底部に木葉圧痕
		38	SA 1	須恵器ハソウ	(12.7)			灰白 N7/0	黄灰 2.5Y5/1	堅緻	自然釉、回転ナデ	回転ナデ				1少	
		39	SA 1	須恵器ハソウ	(11.8)			褐灰 7.5YR5/1	灰褐 10YR5/2	堅緻	回転ナデ	回転ナデ					
16	15	40	SA 2	土師器甕	(14.3)	(8.0)	(19.6)	明褐灰 7.5YR7/1	にぶい黄橙 5YR7/1	良好	横ナデ、斜ナデ	横ナデ	2少				埋設炉出土 外面に煤付着
	16	41	SA 2	土師器模倣坏	(14.0)		5.5	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	良好	ナデ、粗いミガキ	ナデ、ミガキ、工具痕有	5微	4微			屋内土坑出土 内面に黒斑
17	17	42	SA 2	土師器壺				褐灰 7.5YR5/1	赤灰 10YR5/1	良好	工具による回転ナデ	工具による回転ナデ	5僅				
		43	SA 2	土師器甕	(16.0)			明褐灰 7.5YR7/1	にぶい褐 7.5YR5/3	良好	ナデ、指押え	ナデ、指押え	2少				外面に煤付着 接合痕有
		44	SA 2	土師器深鉢	(15.2)			にぶい橙 7.5YR6/4	灰白 7.5YR5/4	良好	横ナデ、指押え、工具ナデ	斜ナデ	4.5少				接合痕有
		45	SA 2	土師器模倣坏	15.0	11.5	5.5	にぶい赤橙 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	良好	ナデ	ナデ、磨き、指押え		微少			
		46	SA 2	土師器坏	(19.0)			灰白 5YR8/2	にぶい赤褐 5YR5/4	良好	横ナデ、斜ナデ	横ナデ、指押え	2少				
		47	SA 2	須恵器甕				黄灰 2.5Y5/1	褐灰 10YR5/1	堅緻	格子目タタキ、工具ナデ	同心円文の当て具痕	1.5僅				
		48	SA 2	須恵器甕				暗赤灰 10YR4/1	褐灰 10YR5/1	堅緻	格子目タタキ、工具ナデ	同心円文の当て具痕	2.5僅				
		49	SA 2	須恵器坏蓋	(11.2)			灰白 10YR7/1	褐灰 2.5Y4/1	堅緻	回転ナデ	回転ナデ				1僅	
		50	SA 2	須恵器坏蓋				オリーブ灰 2.5GY6/1	灰白 10Y7/1	堅緻	回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ				1少	自然釉
		51	SA 2	須恵器坏身	13.1		4.5	黄灰 2.5Y8/1	黄灰 2.5Y5/1	堅緻	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ				2少	
		52	SA 2	須恵器坏身				黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y4/1	堅緻	回転ナデ	回転ナデ					
19	20	54	SA 3	土師器甕	(15.6)			橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	良好	横ナデ	ナデ	3多				
		55	SA 3	土師器甕		6.9		にぶい橙 7.5YR6/4	黄灰 2.5Y4/1	良好	指ナデ	指押え、指ナデ、工具ナデ	4多				
		56	SA 3	土師器高坏				橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	良好	ケズリ、ミガキ	横ナデ		1少			
		57	SA 3	土師器高坏				橙 2.5YR6/6	黄橙 10YR8/6	良好	ミガキ	指押え、ケズリ	3少				
		58	SA 3	土師器高坏		9.6		明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/8	良好	ナデ	ナデ	3微				磨耗が激しい
		59	SA 3	須恵器ハソウ				褐灰 7.5YR5/1	褐灰 10YR5/1	堅緻	カキ目	ナデ				3多	耳が付いている
20	22	61	SA 4	土師器甕	21.0	7.2		にぶい褐 7.5YR5/3	灰白 7.5YR8/1	良好	横工具ナデ、縦工具名で	横工具ナデ、指押え	5多				
22	25	63	ＳＡ４	土師器坏	(7.6)	2.8	1.8	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	回転ナデ	回転ナデ		微少			底面は糸切り底
		64	表土中	染付椀		4.0				堅緻	染付	染付					畳付は無釉
		65	表土中	施釉陶器杯	6.2	3.2	4.0	オリーブ灰 2.5GY6/2	灰白 10Y7/2	堅緻	施釉	施釉					

第３項　溝状遺構

２条検出した。

溝状遺構１（第24図）

調査区北東部より検出した。残存部分は4.5mであり、南南東－北北西方向にほぼ直線に伸びる。竪穴建物１の断面で検出した遺構の深さは約35㎝、断面は「U」字状を呈し、底面には目立った凹凸は認められない。南にいくにつれ浅くなり、竪穴建物1内で確認できなくなる。埋土からは土師器の小片以外に（62）が出土した。

（62）は軽石製品である。両面が摩擦により平らに削られており、側縁も削りによる整形が行われている。用途は不明である。

溝状遺構２（第24図）

調査区北東部より検出した。残存部分は3.8mであり、溝状遺構1の30㎝ほど東側において、溝状遺構１に平行するように検出された。遺構の深さは約15㎝であり、断面は「U」字状を呈し、底面には目立った凹凸は認められない。南に行くにつれ浅くなり、竪穴建物１内で確認できなくなる。埋土からは土師器の小片が数点確認されたのみであった。

第４節　表土中の出土遺物（第25図）

大町第２遺跡の遺物包含層は削平により消失していたが、表土剥ぎ作業中や撹乱層の除去において、古墳時代以降の遺物を確認した。以下に掲載し説明を行いたい。

（63）は底部に糸切痕の残る小鉢である。無釉であるが焼き締められていることから陶器と考えられる。（64）は近世の染付である。内面に釉剥ぎが見られる。（65）も陶器である。底部以外は釉薬がかかっており、底面には糸切底が認められる。

第Ⅲ章　総　括

大町第２遺跡から検出された遺構は竪穴建物５基、溝２条、土坑１基である。竪穴建物はいずれも古墳時代後期の所産と考えられる。土坑１基は時期不明である。溝２条についても時期不明ながら、遺構の切り合いから、竪穴建物よりは新しく、古代～中世と考えられる。
以下、竪穴建物について検討する。

竪穴建物内の一括廃棄について

竪穴建物１からは、埋土中より、多量の土器を確認した。これらは完形に近い状態であることが多いため、廃棄されたと考えられる。なお、遺物は遺構周縁に堆積する黄褐色土からは出土しない。以上から、発掘調査で確認された状態に至るには、以下過程が想定される。

①竪穴建物の廃絶に当たり、上屋を解体する。

②周堤に用いた土（元は竪穴建物の掘削土）を周縁に押しやる。

③黒色土の堆積と共に、多量の土器が廃棄される。

④その後、現代の削平により検出面を消失した状態で発掘調査で検出された。

土器の廃棄が一時であったか、複数回に分けられたかは不明であるが、出土した土器は７期に限られることから、遺構廃絶後の凹み地がある短期間のうちに廃棄されたと考えられる。

土器埋設炉について

竪穴建物１，２から検出された。竪穴建物１の土器埋設炉は遺構中央よりやや南東寄りから、竪穴建物２の土器埋設炉は遺構のほぼ中央より検出された。同じ土器埋設炉であるが、掘方との関係は異なる。竪穴建物１の土器埋設炉は埋設する甕の大きさに合わせるように掘られるのに対し、竪穴建物２の土器埋設炉は、掘方の北に寄せられ、南側は焼土と炭化物が多く含まれる。今塩屋氏の分類に従えば、竪穴建物１の土器埋設炉はⅠ類（埋設土器の上に甕を設置した後、甕の周りで燃焼する）であるのに対し、竪穴建物２の土器埋設炉はⅣ類（掘り方を二段掘りにし、深い方に土器を埋め、浅い方を燃焼部とする）である。なお、宮崎平野において土器埋設炉が盛行した時期は、古墳時代後期とされている。この時期はカマドの数が急増する時期であるが、今回の調査ではカマドを伴う竪穴建物は検出されなかった。

壁際の板の設置について

竪穴建物２の壁面上部に、壁際に垂直に近い角度で堆積する土層と、同じ壁面に黒褐色土の土層が確認された。当時の生活面は砂地であるため、13層は壁面の崩落防止のために設置された「板」と考えられる。その場合、14～15層に認められる黒褐色土は、板を補強することを目的として付近から持ってこられたと考えられる。なお、確認したのは竪穴建物２の西壁の一部だけであるが、四方の壁面より14～15層に似た黒色土の堆積が認められたため、本来は竪穴建物2の全周に設置されたと推測される。

遺構内の土器埋納について

竪穴建物１からは、遺構南辺中央部に方形の土坑があり、埋土上層から模倣坏が出土した。また、竪穴建物２の遺構南辺中央部の黒褐色土内にも模倣坏が出土した。土層の堆積状況から、これは竪穴建物の建築時ないしは使用中に、既に埋納が行われたと考えられる。隣接する大町

遺跡からも、大町第２遺跡とほぼ同時期である８号竪穴住居の遺構南辺中央において、方形の「住居跡内土坑」が検出されており、古墳時代後期、宮崎平野で竪穴建物建築時に盛行した祭祀行為と考えられる。

出土遺物について

大町第２遺跡の出土遺物は、今塩屋氏、松永氏の土師器編年では７期にあたる。須恵器ではTK43～209型式併行とされているが、小型短頸壺の形状からも、時期的な矛盾はない。つまり、大町第２遺跡が居住地になったのは７期にほぼ限定される。

７期はカマドの定着が特徴とされているが、本遺跡からはカマドが検出されなかった。そのためか、この時期に卓越するとされている長胴化した甕はごく少量に留まる。ただし模倣坏が多量化・多種化を遂げると言うもう一つの特徴は、本遺跡の出土資料からも伺える。

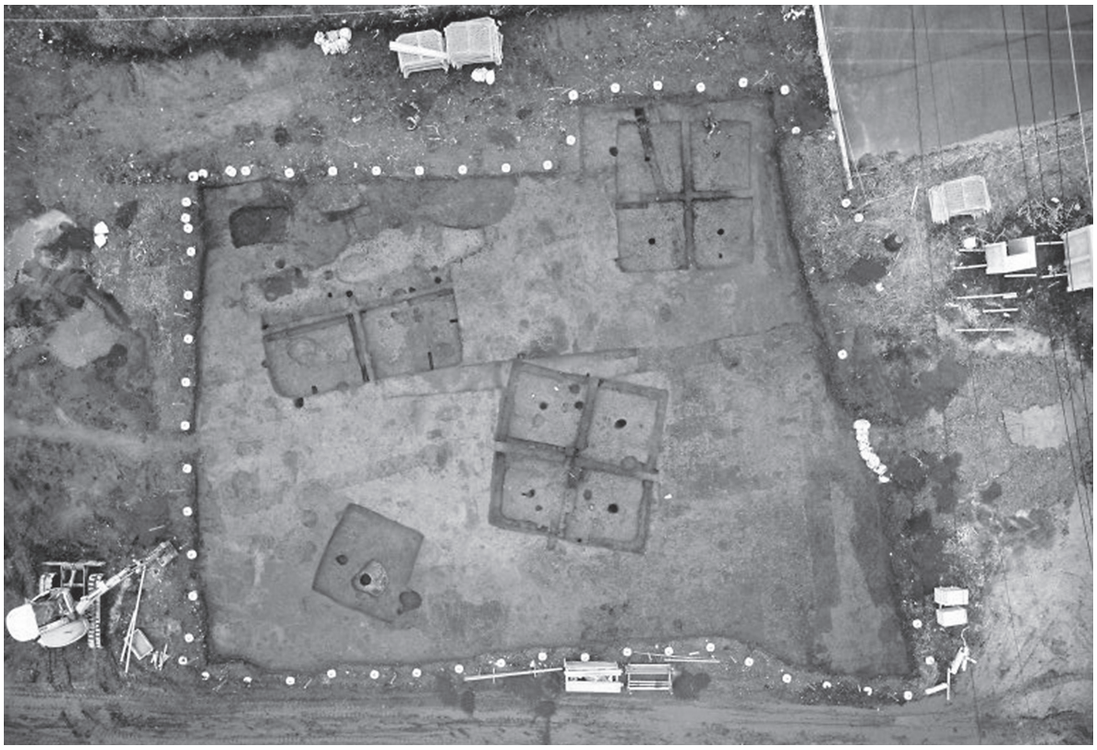
大町遺跡との関係

大町第２遺跡の出土遺物は、大町遺跡の12号竪穴住居に類似しており、今塩屋氏、松永氏の土師器編年の７期、大町遺跡に展開した集落の一部に大町第２遺跡が存在したと考えられる。一方、大町遺跡からは続く８期の遺物も多く出土するが、大町第２遺跡には認められない。つまり、大町第２遺跡は、大町遺跡に存在した集落の拡大化の中で一時的に居住地となるが、集落の安定化と共に大町第２遺跡は居住地ではなくなったという変遷を見ることができる。ただし、残存状況の悪い環境における限定された調査区域からの情報であるため、推測に留めておきたい。

古墳時代中期末～後期は、宮崎平野内で大規模な集落が出現する時期である。宮ヶ迫遺跡（佐土原町：6c代～7c初頭）、山崎上ノ原遺跡（阿波岐原町：5c後半～6c代）等がそれである。宮崎平野東部においては、大町遺跡や北中遺跡がその代表的な遺跡と言えるだろう。大町第2遺跡はその中の一つの調査事例であり、今後の調査事例の追加により、集落の動態がより正確に掴める日が来ることを待ちたい。

（参考文献）

今塩屋毅行　松永幸寿　2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」
『第5回九州前方後円墳研究会　古墳時代中･後期の土師器－その編年と地域性－発表要旨資料』
今塩屋毅行　2004「南部九州古墳時代の火処－「土器利用炉」に着目して」『福岡大学考古学論集』
宮崎市教育委員会編1998『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集
宮崎市教育委員会編2014『宮ヶ迫遺跡』宮崎市文化財調査報告書第100集



大町第２遺跡（上空から）

竪穴建物１　検出状況　南から

竪穴建物１　完掘状況　北から

竪穴建物１　遺物出土状況　南東から

竪穴建物１　遺物出土状況

図版２

竪穴建物１　土坑と出土土器　西から

竪穴建物１　土坑と出土土器　西から

竪穴建物１　土器埋設炉検出状況　南西から

竪穴建物１　土器埋設炉検出状況　南東から

竪穴建物２　遺物出土状況　北東から

竪穴建物２　完掘状況　北西から

竪穴建物２　土層断面　北から

竪穴建物２　土層断面　北から

竪穴建物２　南壁出土遺物　北から

竪穴建物２　南壁出土遺物　東から

竪穴建物２　土器埋設炉検出状況　東から

竪穴建物２　土器埋設炉土層断面　東から

竪穴建物３　検出状況　南から

竪穴建物３　遺物出土状況　東から

竪穴建物３　完掘状況　北西から

竪穴建物４　検出状況　北から

図版４

竪穴建物４　土層断面　南から

竪穴建物４　完掘状況　北西から

竪穴建物５　土層断面①　北東から

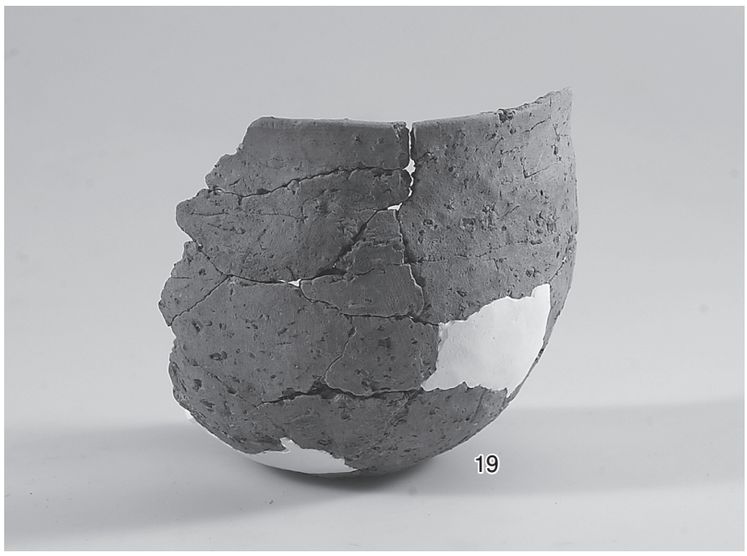
竪穴建物５　土層断面②　北から

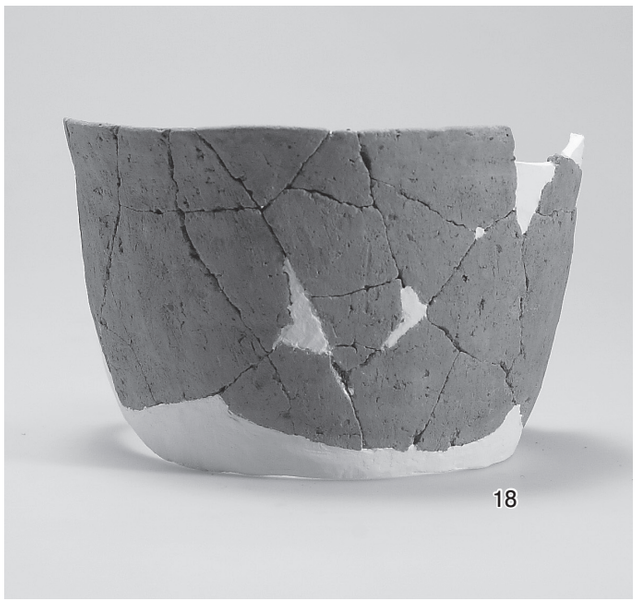
土坑１　完掘状況　南東から

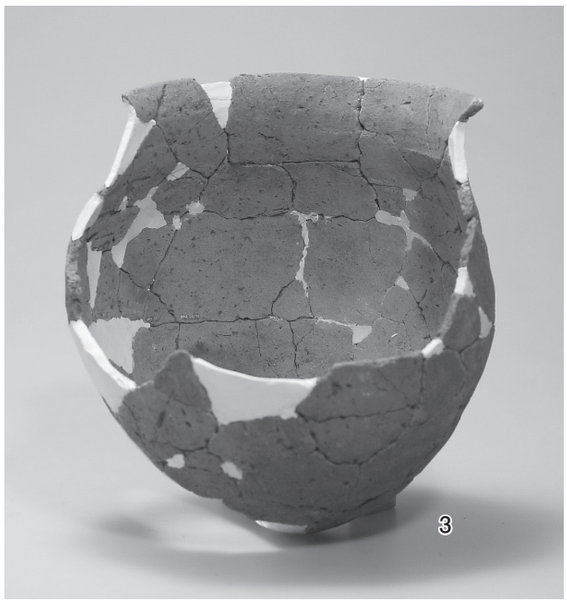
土坑１　完掘状況　真上から

調査区近景　西から

作業風景　南西から

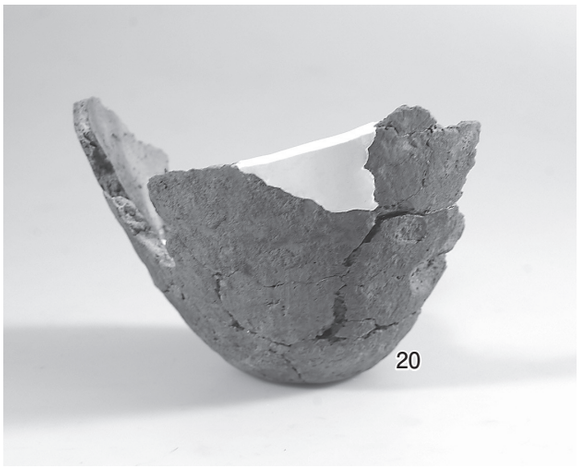






遺物写真（１）

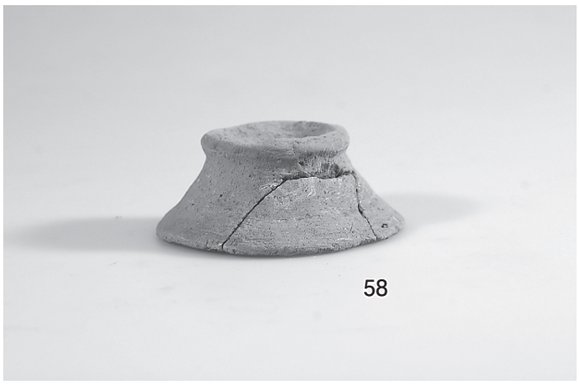
図版６

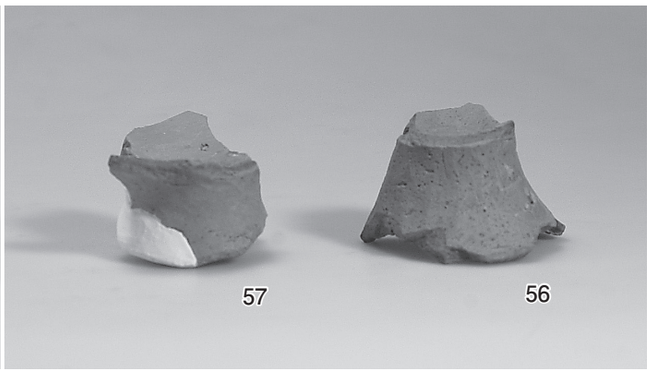


遺物写真（２）

遺物写真（３）

図版８





遺物写真（４）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおまちだいにいせき
書名	大町第２遺跡
副書名	宮崎駅東通線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第120集
編著者名	金丸武司
発行機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-2101　宮崎市大字跡江4200番地３
発行年月日	2018年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	種別
おおまちだい 大町第２遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 よしむらちょうおおまちこう 吉村町大町甲	45201	21-153	31°54′57″ 付近	131°26′28″ 付近	道路建設	集落

	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
大町第２遺跡	H27.８.18 ～ H27.10.８	654㎡	古墳時代	竪穴建物	土師器
				土坑	須恵器
					磨石

宮崎市文化財調査報告書　第120集

大町第２遺跡

宮崎駅東通線（西中工区）整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30年３月

宮崎市教育委員会